

繪の返見紙表「鑑人職皇天明用」

用明天皇職人鑑

近松門左衛門作

序 宋の陸子靜が曰く。東南海の聖人此の心を同じうし此の理を同じうす。南北海の聖人も亦同じと。されば大中臣の本系に。嚴牙の本末を傾けず中柄ふる人中臣といへり。是ぞ實相中道の佛の教神の法。皆一筋の秋津道傳はる種や和歌の文字。三十一代敏達の子。恵みかやく瑞穂の國オロシハ八咫の鏡の。影清し。地然るに當今甚だ文史の學に長じ給ひ。民を以て天とすとめぐしひたし給ひければ。君が八咫の外迄もッシ君子。國とぞ仰ぎける。地御同腹の御弟山彦の皇子萬卷の文車。牛に汗して轟かし謹んで奏聞ある。誠に先帝欽明の聖代に。五經の博士易の博士。曆道醫藥の書籍迄來朝すとは申せども。外道の法未だ日本に渡らず候。是はこれ四韋陀と號す外道の書。

此の法を學ぶ者は因果を撥無し來世を期せず。現身に虚空を飛行し雨ともなり風ともなり。億萬劫の命を保ち。上天を祭つて生きながら上界に生ずる法。そのかみ五天竺に蔓つて君臣安樂を得たる處に。釋迦といふ者佛法を起し外道衰へたと傳へ候。目出度き國の御寶天下に弘め給へかすと。希代縁によつて招き求め候と。地奏し勤めし其の顔貌外道の術に迷はされ。魂に入りしとは後にぞ人を知るとかや。帝を始め奉り百官歸伏の思ひをなし。重ねて諸卿の勸物に任せ。此の書を和國に弘むべしと。フシ御沙汰とりまくまぢくなり。地爰に別腹の御弟豊日花人親王は。黄卷朱軸の經典を七寶莊嚴の羽車に盛り積んで。庭上に昇き据ゑさせ正笏一揖して奏聞ある。詞そも

此の卷々は大聖世尊釋迦牟尼佛。五十餘年の妙經父帝の御宇に。百濟國より渡りしに。時機未だ熟せず。追返されし彼の小舟博多の沖にさすらふる由承り。臣密に尋ね得て拜見し佛教の主旨を鑒みるに。智者は禪定觀念の理によつて。三世を悟り。愚者は讀誦戒法の行によつて菩提に入り。戒定恵の三覺廣くは三千世界。一切衆生に亘り略しては一心に歸す。一心則ち十界に遍滿して自在をなすを佛といふ。これ萬寶を降らす如意寶珠。地此の教に則つて天下を治め給ひなば。我が朝の天神地祇感應の和光を添へ。なほ君が代は萬代と。治まる國の御寶とッシ恐れ。入つてぞ奏せらる。地山彦の皇子聞きも敢ず。詞ヤア花人親王珍しの奏聞やな。そも佛法は先帝の御宇に異國の法と捨てられし。其の先帝と申したは誰なるぞ。主上を始め臆も貴邊も父ならずや。三年父の道を改めずとは儒道の教。但し佛法は親に背く道なるや。花人やがてイヤ仰迄

も候はず。父の非を改むるは孝の一つ。君父の命重しとて悪を改めざるを道とやは申すべき。それは舟端に刻を付けて刀を奪ぬる譬に似たり。よしそれもさも候へ。佛教をさへ捨て給ふ父の詞を守り給はばなどか外道を用ひ給ふ。地親といひ兄といひ斯く申すも孝の道。邪道を捨てて正法の佛の御法を受け給へと。誠を盡し宜へば皇子大きに氣色を損じ。阿ヤア邪道とは何事ぞ。和主が尊ぶ佛の弟子神通の目蓮は。竹杖外道に打殺され。漚樓外道と聞えしは八

を見せし。地かゝる不思議が叶ふべきか。ならば連れて行けと。詰めかけく席を打萬劫が其の間。四大海の水を耳の孔に收め 釋迦が説いた極樂世界寂光淨土はいづくつてぞ申さる。阿ヤ、極樂の在所案内申さて。過去七佛も諸菩薩も水に渴して憂き目にある。舟で行くか馬で行くかサア。在るん。これ君見すや君が尊ぶ道書にも。呂洞



紙表の本字細入繪

蜜が袖の中の青蛇を抛つて。黄龍に參ぜしは。身の中の蓬萊山を唯心の淨土とあらはしたり。一心の外に何處かあらん。外道の元祖提婆達多是如來の三十二相を學び。千輻輪に金具を使ひ。眉間白毫に螢の光を借りしぞとよ。惡法を説く釋迦ならば何とて提婆は似せけるやらん。地ア、勿體なし。慢心を挫いて正道に入り給へと。理非を正して教化ある。道理かな此の親王御成長の後。事も愚かや日本佛法の開基。聖徳太子の御父帝用明天皇と申せしは此の親王の御事なり。時に物部の大臣進み出で。いづれも御連枝の御中といひ。殊にかゝる聖賢の道此の勝劣は勅判にも及び難し。所詮兩方の經卷を火に燒いて試みば。邪正の驗あるべしと用意あれば佛道に。心を寄する人々は勿體なしと歎くもあり。皇子方にはすは大事と眼を塞ぎ觀念し。三日八臂摩醯首羅天紕紐天。加比羅天溥樓佉法天一つの驗を見せ給へと。齒をくひしばつて立つた

りけり。主殿司松振り立て兩方一度に薰する。あらうたてや佛經の表紙紐に火移つて。華嚴阿含方等般若大乘涅槃沙羅林の夕の。煙消え残る。フシ玉軸ばかりに成つてけり。地外道の書には火も移らず雪を焚くかと怪まる。山彦皇子大音上げ。觀覽あるか我が君佛道邪法に極つたり。邪法を信する花人は大日本の怨敵たり。罪科輕かるべからずと高聲に罵るは。フシ苦々。しぞぞ見えにけり。地花人親王莞爾と笑ひ。調ア、さな宣ひそ兄君。正法に奇特なし譬へて申さば。草木の誠の花は嵐に散り霜に枯るる。風にも霜にも痛まぬは偽の造り花。まつ其の如く石金にても燒くを以て火の徳たり。況んや火を取つて紙に移さば燒くる道理燒く道理。物を燒かずば火の益なし紙も燒けぬは天魔の術。信するに足らず願ふに足らず。地眞實微妙の佛の不思議驗を見せしめ給へやと。合掌あれば有難や残りたる玉軸より。七千餘卷の文字の數々一點失せず現れし。

光の中より妙覺の如來の容貌ありくと。拜まれ給ふと見えけるが肉髻より電光。移ると等しく外道の書は皆灰燼と煙り行き。紫雲に乗じ御佛は。フシ雲居に。上らせ給ひける。地皇子は黙して赤面す月卿雲客手を合せ。あつと感じて禮せらる主上甚だ觀感あり。妙なる業を見るからは異國の法として捨つべからず。當國向原に伽藍を構へ佛法流布を待つべしと。稻目の臣にぞ勅詔ある重ねて花人親王を玉座近く召され。佛法の大意は大慈大悲と傳へ聞く。されば朕世を治めてより未だ一事の慈悲をなさず。天が下に觸をなし土民には貢をゆるべ。商人に黃金を施し扱職人には官位を與へ。諸國の受領に任すべし。御身宜しく計らひ給へと。畏りなる詔此の時よりや諸職人、今も國名を許されて時に近江や世に出雲。其の萬代も竹の名の。筑後の後の末長き御代に。住む身ぞ。三豐なる。フシさる程に。地山彦の皇子の館には小野の土丸伊駒の宿

禰。彼等二人は翼の臣中にも外道の道士。

伊賀留田のますらは神變希代の魔法を得て

。則ち皇子の師範たりしが今日大内の評論

勝負は如何と案じ煩ひ便遲しと待つ所に。

遠御なりとぞ呼ばはつたる三人すはやと走

り出で。さて御首尾はと尋ぬれども皇子は

不機嫌返答なく。冠もぎ捨て紫色の裾脛高

く捲りあげ。どうど坐してくわんくたる

聲をあけエ、無念至極せり。今日禁庭の

暗れ業佛道外道の争に。我が法は打負け

佛道のために。寺とやらん伽藍とやらん建

立せよとの勅諭。それさへあるに日本國の

諸職人に。官位受領をなすべしと花人親王

に是を仰せ下さる。然らば弟の花人は日

々に威勢蔓つて春宮に立たんは必定。時に

は鷹が王位の望遠すべき期はあらじ。此

の上は高麗唐土へ押渡り。韃靼契丹南蠻蝦

夷の夷を語り。一戦の矛先に運を極むる

ばかりなり。エ、思へば奇怪口惜しと。怒

れる涙はらくとスエテ鮫人が玉を貰けり。

伊賀留田のますら承りこは心弱き仰や候。

たとへ腸持の釋迦阿彌陀が出たるとて我が

法に敵ふべきか。いで某が魔法を以て。形

はこゝに在りながら兩眼は四方へ飛ばして

。親王方の案内を見届けて注進を仕らんと。

地虛空に向つて大立谷神の呪を唱へ。還丹

の法を行ひしが刹那が間に一條の。虹大空

に棚引いて左の眼抜け出でて。眼火四邊に

散亂し雲蛇に巻かれて。三重へ飛行する。フシ

ますらは其の儘。地眇目となり申し。

暫しの間を待ち給へ。これかつせん王が

吹目の術。三界を見巡る事半時を過ぎず候

と。地語る詞の中空にますらが左の眼の玉。

光と共に飛歸り本の眼に收りしは。フシ只流

星の如くなり。同ますら横手を丁ど打つて。

花人親王の御所の様よつく見届け候が。珍

しき事こそ候へ其の仔細は。豊後の國の住

人眞野の長者と申す者。寵愛の娘玉世の姫

繼母を疎み殊には又。女の身にて遠國に住

み果てんも物憂しとて。百島大夫と申す乳

人を具し春の頃より都に上り。檜隅の岡に

館をしつらひ居住仕り候に。彼が被官の職

人どもに官位受領をせさせん爲。金銀財寶

を以て親王へ略し諂ひのあまり明日は。

親王を招待し御茶を上げ申すとて。料理獻

立表換へ其の用意最中と見て候。地これ

屈竟の時節たり我々が秘法を以て。毒氣を

吹き込み親王の執權檢非違使勝舟。百島太

夫と不和になし同士戦を致させなば。親王

は一本立誰侍く者もなく。討たうとも縛

らうとも。箱中の鳥に候と。フシ語りけるこ

そ不思議なれ。同皇子忽ち色を直しテ、大

慶々々。眞野の長者が玉世の姫は音に聞い

たる美人なりなほ端的の法を以て帝位に登

り。彼の姫を後宮に立てんは如何にとあり

ければ。地それは危ぶむ所にあらず我亦一

つの秘法を以て。彼等に障礙をなし申さん

と天に向へば不思議やな。ますらが右の眼の

玉又抜け出でて棚引ける。雲に入るかと見

えけるが則ち小仙の。奇形となつて雲路行

く。鐵拐仙の再來かと、フシ奇異の。思をなしにける。地本懐時を移すべからず先づ悦びの一献と。青海波と名付けたる一吸九盃の大蛇。漬床に飾らせて既に。酒宴ぞ 三

〽 始りける。フシ鄙人と。誰が言ひ初めし

國の名も。心の花の豊後梅真野の長者の祕藏子の。玉世の姫はたまの。スエテ上方住居習はうより。地慣れて所の風に染みたる髪容。少し残るは國訛。それも詞のフシしなならし。地今度花人親王御執奏に任せ。

町人の受領勅許なりと傳へ聞き。我が國許の諸職人受領望みの輩を。御取次申さんと其の人々を繪にかゝせ。宮を請じ参らせらる。花やかなりし御接待オクリ心へことばも及ばれず。地斯くて親王館に入らせ給ひければ。姫中門に出迎ひ及ばぬ雲の上人を。賤が伏屋の御設け恐多しとばかりにて。俯

向きざまに御顔を。じろりと見たる上臆フシこれ戀知りの目癖ぞや。親王もはや御心に思ひ入江のこがれ舟。笹のをささの一夜

をだに寝亂れ髪。地解きほどく職人盡しの手業にて。事寄せつ又かこつけつオクリ互の心を語らるる。

職人盡し

地是ぞ此の大内の縣召かや諸人に。司を賜びてそれ〴〵に國名をつきし烏帽子子の。始にかけし烏帽子屋が身を立烏帽子諸郎は。三大臣のお召しとして。スエテ高き位やかけ烏帽子。十二の冠式法の。中に人目の透き額。フシ風折烏帽子。折々は。戀に心や採烏帽子。平禮小結梨子打や。烏帽子屋なれば

是をとて。先づ頭にぞ。フシ置かれける。次は琴屋が爪立てて家職に骨を折琴の。調に君を松風やじつと二人が。フシねじめよき。繼三味線は場を取らぬ間に嬉しき細工人。こゝに見えしは筆結ひの千歳の。昔千里の

海。隔てし中の通ひ路も。スエテ物言ひ交す中立は。假名書き筆の假名文にオクリ眞書。筆の眞實の法の教も學ばせて。人の心に花咲けば實も奈良油煙手合せに。朽ちぬ寶や

フシ握り墨。澄むも濁るも世の習ひ。人のふり見て我が振袖の。姿直せば心の中も。月は眞澄の鏡屋の。鏡は神の御影ぞとて。伊勢の守とも。フシ召さるべからん。扱其の次

は韃吹く鍛冶屋の挺の家てつ。からり。ころり。てん〴〵からの相籠も。フシ打ちに打物。もとは焼刃の焼物なれば。備前の守とや名にし負ふ。櫻が色に。花塗の吉野漆の塗師屋蒔繪屋檜皮屋に。軒の御簾屋の玉簾。フシ伊豫の守とも召さるべし。フシ我が

通ひ路を。塗籠めて。風を通さぬ壁塗はかくと白地の扇屋の。折さへあらばフシ折を得て。互に見まく。星兜具足屋弓屋武夫も。親子妹背は情知る野邊の。木地屋の轆轤引きひくや夕なの。梳櫛や。亂れ鬢櫛人はよも。フシ水櫛とこそ。思ひしに。フシだが三

つ櫛に。名を立てて。包めど餘所に。雖は透す霧は通さぬ桐の箱。指物屋より繪物屋の。地曲らぬ木竹捻ぢ曲けて締めてそこの。を月ぞすむ桶屋が妻の寐心も。よしや濡ら

してきぬぐくにフシ干してまだひぬ傘屋。さして降らねど紅葉も。時雨の雲に染物屋。染めて上繪屋縫物屋。糸もて通すみすや針。綻びやすき浮名をも繋ぐ数珠屋の百八の。思ひよるなをフシ我が思ひ。如何晴らし給はると御衣の袂をひかゆれば。親王も亦御心ぬるみてとくる銅屋。二人の戀路一對の錫屋瓦屋かはるなと。しと、背中を叩いて延す藥罐屋に。詞の花やかざり屋の飾らで思ふ中ならば。いざ屏風屋の小蔭にて君と。我とはねり物やこちの寐衣の帯解きて。とんと其方に煙管屋の。仲よしす屋となり給ふ縁の程こそ、不思議なれ。

地爰に親王の執權檢非違使勝舟は。御留守に残りしが思へば四方に皇子方。氣遣しと馳せ來り奥の體を窺へば。酒宴亂舞の眞最中エ、まだ盃はとれまいと。辛氣をもやし居る所に百島太夫。金の銚子に土器添へ廊下過ぐるをこれ太夫殿。イヤア勝舟殿が先づ以て今日は冥加に叶ひしお成にて。姪が

恐悅我々迄も有難さ。扱職人の悦びいづれも冥加の爲と申し。勝手に相詰め罷り在る。扱是は長者が家の銘酒國許より到來す。是を差上げて千秋樂に致さんと存ぜしに。親王様は只今御假睡にて候へば。御迎ひの様子をも後程披露申すべし。先づ御酒一つと言ひければ勝舟聞いて。残るかたなき御馳走さぞ御勝手に御草臥にて候べしと。地

扱撈も時移り既に夜半のかねてより。ますらが行ふ魔法の形天井に現れ。二人に邪氣を吹きかくれども、フシ更に人目に見えざりしが。地銚子自然と飛上り勝舟が眞甲に酒ざんぶとぞか、つてけり。吹込む毒氣五體に浸み只熱湯の如くなれども。外道の業と知らばこそ。身じまひして百島が膝元へつ

つと寄り。イヤイ爰な運命つきの業人め。山彦の王子には威勢が怖いか但しは利慾で頼まれたか。どうでも己れ一分の意趣あるべき様の覺えなし。世に出生して三十餘年、人に指でもさ、れぬ男子。沸き返つたる酒

をかけ隙間を見て討たうとや。我を討つて我が君を害せんとの巧みよな。サア己れが首は獄門道具高札に書く爲なれば。眞直に白狀せよ百島ぎよつと仰天して。イヤコレ勝舟殿銚子に手をもかけばこそあれ。殊に冷酒熱からん様もなし。ム、聞えた聞えた。御用心の折柄なれば嚇して心を試さん爲な。それには些と御粗相でないかと言へば。イヤだまれさ。檢非違使勝舟が粗相とは舌長しと。地諍ふ内に異形は手をのべ百島が眉間を。割れてのけとはつたと撲つ。百島太刀を押取つてやい公家侍。凡そ薩摩二才とて九州者は端喧嘩せず。武士と武士との口論に面をはるは何事ぞ。怵へる程は怵ようが堪忍藏の戸が開いた。ま一度指を

さいて見よ腕骨切つて切り下けん。サア腕を出して見よと鐔元寛けかゝりける。ヤイこ、な狼狽者。己れに何を遠慮して腕先でするものぞ。九州者の首を取る公家侍の手並を見よと。地斬らんとかゝる勝舟が眞

甲をはたと打つ。ヤア己れこそ卑怯者とつ立ち上れば彼方を打ち。此方を打ちつけ叩き付け。雙方一度に抜合せ。ヤア物狂ひめ餘さじと切結びては切りほどもき。大庭に飛んで下り左手へ追つ込み右手へ切込み散々に打亂れ。裏門さして切出づるオウリ外道の所爲こそ怪しけれ。フシ斯くとや物の。地告げたりけん山彦の王子只今は駈け來り。御門外に突つ立ち候御用心あるべしと。門番の者ども口々に注進す。女房達は怖ぢ恐れ太夫殿はおはせぬか。百島太夫殿と呼び廻れども音もせず。若侍は酔ひ臥したり勝手に詰めたる諸職人。立騒けども丸腰のフシ顛ひ廻つて埒あかず。地度を失ふ折柄に桶ゆひの久馬平とて。小兵ながら大力人々立寄りこりや久馬平。此の度の御用なり武夫と偽り。皇子を早くほつ返せ如何にと言ひければ。同なう勿體なや鬼のやうなる悪皇子。殊に刃物は槍鉈より外。太刀とやらん刀とやらん手に取つたる事も

なし。地真平御免と逃出づるをさ言うては事すまずと。無理無體に衣裳させ太刀よ袴よ直垂よと。フシ既に用意をしたりける。地はや其のひまに山彦は衣冠も着せず只一人。駒を飛ばして乗入りしは慾天の阿修羅王。龍馬に駕せしも斯くやらん馬上ながら大音上げ。鷹が心をかけし女。今宵花人親王に忍び逢ふと聞きし故。仲人の爲來つてある見参やつと喚く聲。深山も裂けて法螺貝のフシ海に入るかと恐ろしし。怒れる聲にてかつらくと笑ひ。同、是は仲人入らずの新枕ごさんなれ。互の初戀面はゆからん。地いでく王子が挨拶せんと馬乗り放しつつと入り。白書院黒書院納戸帳臺化粧の間。渡殿細殿鬘殿まで妻戸障子を蹴破つて。御簾も几帳も引切りく駈入り駈出で。尋ね廻つて南無三寶二人しつほと臥し給ふ。臺子の間の高遺戸。さつと明くれば衣引被きフシ生きたる心地はなかりけり。地皇子大きに怒をなし根太も折れよとどう

くと踏み。衣引退くれば兩人はあつと塊ぎり起上り。涙も汗も身を浸しスエテ顛ひ慄きおはします。同これ花人女が尊む佛道には。邪淫戒とて妻ならぬ妻は忌むと聞きしに。珍しの佛法や。佛者も破る邪淫戒皇子が保つて益もなし。地汝が寝たる暖まりに臍も床に入るべきにサア我が見る前にて今一度しつほりと寝て見せよと大太刀寛ち逃ければ斬らんす氣色なり親王も姫君も。立ちもやらす居もやらすそろりくとしさり退く。どつこいゝ動いて見よ左程寝る事叶はずば。思ひ込うだる妹背の中定めて命は惜しからじ。三途の釜死出の床永い來世で寝るならば。枕を土壇に二人が首を並べうかサア寝て見せるか切らうかと。じりゝくと附け廻すは番ひ居る野の床鶉。鶉の見入りし眼ざし。危ふさ辛さ恐ろしさ。フシ醫へて言はん方もなし。エ、見れば腹立ちサア來れと。二人を左右に引つ掴み駈け出でんとせし所へ。地かひぐしけなる若侍一文

字に飛び來り。皇子を取つて投げのけ親王
姫君押圍ひ。枯木立につつ立つて大音上げ
て。我を誰とか思ふ。玉世の姫が譜第相
傳のをけ人半揮天王の後胤。かづらゆひの

親王の末孫樽井の小樽といふ。大剛の者桶
有とは定めて音にも聞きつらん。早く歸れ
歸らずば三年竹の八つ割にて。汝が五體に

七つ輪を入れ頭から爪先迄。鍔鉈をみしら
せてなし物桶にしてくれん。地はいはれぬ皇
子の手桶だて。身が前では置いてくれ。お

け／＼おけやと罵りしは、フシかひ／＼しく
ぞ見えにける。皇子騒がずム、彼奴は眞
の武夫ならず。何處の下司め推參者とはつ

たと呪めばヤア下水をけとは誰が事ぞ。御
分が其の盟程の目をむけば。こつちには水
風呂桶の目を持つたと、地くわつと見開き

め廻し。こりや親王様も姫君も某が御供す
る。指でもさ、ば胸をけ切る。寄つて見よ
と身を堅め、フシたるみを見せず睨み寄る。

地皇子は下郎と侮つて手ざしもやらす太刀

の柄も。ひしけて退けと、鐔元くつろげ瞬も
せぬ面色は。淺紫の額の筋眼の内は八角
の池の氷に紅葉のちり／＼血筋血走つて。

隙間もがなと睨み寄る久馬も先を取られじ
と。はがね鳴らし拳を張り頭の汗の煙は。
枯野の霜の霜枯れて朝日にけぶる如くにて

フシ引かんず氣色は無かりけり。地斯かる所
へ土丸宿禰馳せ來り。切先揃へて駈け向ふ。
ハア、物々しの奴ばらや鬼神と言はれたる。

皇子に楯づく某が己れ等に恐れうか。鉾桶
くさい奴等やと、フシかんら／＼とぞ笑ひけ
る。地物な言はせせ打殺せ承ると飛んでか

ゝるを。引つ外し下手に入つてむんずと抱
き上を下へと振ぢ合ひける。其の際に皇子
宿禰は隙間なく親王姫君引つ立て行く。や

れ人は無きかあれ止めよと組合ひながら呼
ばはれば。琴屋鏡屋烏帽子折數珠引煙管屋。
塗師屋檜物屋指物屋藥罐屋などに至る迄

所在の得物を提げ／＼餘すまじとて追つ
かくる。久馬平は土丸と揉みに揉んで組

合ひしが。土丸四つ手に引結び目より高く
指上げ。ゑいと云うて打付くる宙にてひら
りと跳ね返し。土丸が小足を取り大地へど
うど打付け。地馬乗にしつかと乗り。一息
ほつとついたるは、フシ心地よかりし手柄な
り。地か、つし所へ百島は宮を奪ひ引返せ
ば。勝舟は玉世の姫を肩に引かけ立歸り。
互に主君を取換し思へば外道の所爲なりし
に。知らで危き同士戦怪我は無いか過せぬ
か。主従安穩珍重々々さり乍ら。斯く迄外
道襲る上は都住居氣遣し。姫君は本國へ早
々御供致されよ。此の檢非違使は都に残つ
て暫く。皇子を防ぐべし。久馬平は我が君
を四國の方へ御供せよ。追つ付け跡より追
ひ付かんまかせて桶屋が門出と。土丸を
取つて引起し首掻き切つて負ひ奉り。地ツ
只今まかり龍田越夜半に紛れて落ち行きけ
る。外道一人滅すは佛千體供養とかや。殺
生却つて忍辱の信心。慈悲心菩提心大善根
の種植ゑて。末葉の末も竹の園生榮うる。

代こそ久しけれ。

第二

地同じ世に猶在りながら逢ふ事は。八重の
沙路の彼方なる佐渡が島の流入。五位之介
諸岩といふ者あり。彼は元來花人親王の後
見にて。檢非違使勝舟が弟なるが。先年色
道の盛名によつて勅勘を蒙り。此の島に流
し放たれしを當國の郷侍。松浦の庄司が
情にて。スエテ辛さは同じ世の中に。地名を
ば下部に引きかへて。歌取の京雀と呼ば
れ。領内の離れ島石地を開き畑を打つ。土
民の業を膏養に命をつなぐ繩の帶昔の弓矢
太刀刀。今日取換ゆる歌の柄の長からぬ世
を徒に。新島守となり果つる。身の習ひ
こそ。フシ不便なれ。頭を忘れぬ。物の葉も。
染めし錦を我ならで。誰が着て歸る故郷の
空。フシ姿は。案山子に似たれども。地見な
れ逢馴れ友なれて下り居てあさる雁がねも
。今は恐るる氣色なくオクッ伴ひへなつく優
しさよ。地五位之介振り仰向き獨言してこ

は如何に。あの一葉の雲の色こそ心得ね。
正しう王城に立つ雲なり。地天子のましま
す所ならで此の島に。此の雲氣現るゝこそ
不思議なれ。ハア、訝しと守り居る處に。追
うても立たぬ雁がねの葉のそよぎに驚きて
。残らず一度にばつと立ち雲居遙かに。三重
へ飛去りける。フシいよく不審。地晴れや
らさ葦間播分け磯邊を見れば何處よりも
白波に。小船一艘漂ひて都育ちの女房の。
殿上人と思しきが濡れたる袖を絞り兼ね。
包み兼ねたる涙のさまスエテ。此の世の人と
も見も分かず。地いかさま是は七夕の年に
一度を堪へ兼ね。又取越しの天の河と渡る
舟か化物かと。思へど思案に落ちざりける。
五位之介歌振上げこれく。先づ汝は何者
ぞ。此の所は離れ島。流入ならで餘の舟の
來る處でなし。地扱は海賊八幡舟よな。但
しは往還の護摩の灰か盜賊か。一々に打殺
し歌ついでに此の島に。植ゑてくれん待つ
て居れ汝等と。乗り移らんとする所を。な
う暫く更々左様の者ならず。都方より西國
へ身を浮舟の舵を絶え。横ぎる風に吹放さ
れ命からく。此の島に。苦漏る月の行末を
なう憐みてと打口説き。頼む詞のひつはな
し。愛くろしけにほのめかし。フシ泣いて言
ふさへ戀らしし。地五位之介もさなきだに
都戀しき時しもあれ。心浮かれてム、なに
都人なるとや。色よき若菜お上臈たつた
二人の乗合舟。血氣盛りの戀風の追手に得
手に帆を上げて。舟の底抜けなんだはまだ
お仕合く。地色氣にかつゑし此の島なれ
ばお若菜でも上臈でも。我等もちつとさら
ば便船申さうかと。乗らんとすればア、こ
れく。お罰を受けて後悔あるな。忝く
も是は主上の御弟官。地花人親王様よとあ
れば。ハツア扱は我が君なりけるかと。歌
をからりと投捨ててスエテ頭を。地に伏せ涙
を流し。フシ御懐しやとぞ敬ひける。地親
王舟より上らせ給ひそも汝は何者なるぞ。
御見忘れは御道理。是は往んじ頃勸蒙

り。此の島へ流されし五位之介諸岩が。成れの果にて御座候と申しもあへぬに親王は。扱は汝は古への五位之介なりけるかや。自ら幼き其の時に見し。扱は無きぞとよ。

我とても此の如くあさましき姿を見よ。如何なれば主従が斯く迄は成り果てしさり乍ら思はず。お事に逢ふ事は地獄の底の罪人の。佛に逢ひし心地ぞやと。勿體なくも諸岩が朽ちたる蓑に抱き付き。フシ御聲を。あけてぞ泣き給ふ。諸岩も諸共に。咽せ返りく。フシ。御應答も申し兼ね。稍あつて扱如何なれば斯様には。零落させ給ふ事覺束なしと申し上ぐれば。聞さればとよ。兄宮山彦の皇子外道を信じ。王法を傾けんと都を騒がし。自らを討たんとし給ふ故。地汝が兄の檢非違使は跡を防ぎ。扱自らは職人に介抱せられ。西國方へと思ひしに其の者さへ病に臥し。是なるはそれが妻女ながらもかひなくしく。夫が代りに召具したり。語るも言ふも便なさまとステテ又御涙にくれ給

ふ。五位之介承り驚き入つたる御事かな。

然れども某兄弟候うちは尊意を安んじおはしませ。只今某主人と頼みし。當島の主は松浦の庄司とて由ある者の後家の尼公。老女とは申しながら總領は松浦の兵藤太。殊更乙の佐用姫は某を京者として。心にくくや存じつらん様々情を加へ候故。地若しもの時の便にもと忍びて交す手枕に。深き妹背と成り候これ幸ひに候へば。一先づ御供仕り時節を窺ひ姫に語り。兄や母を頼みなば一方の御用に立ち申さんは必定。先づそれ迄は恐れ乍ら都に残る兄弟の尋ね下りしと申しなして日を送り。行末目出度く此の憂さを昔語になし申さんと。御力をつけ奉り様々いさめ參らする。親王御感料ならず嬉しき人に巡り逢ひ。頼もしの心やな下人と更に思はれず。父天皇の今こゝに。蔵らせ給ふ心地ぞやと。忝くも諸岩を。伏拜みく。フシ御落涙こそ頻りなれ。地時も移れば秋の日の暮方近き雲の雁。一列連れて下りる

しが中に一羽が翼を擴げ。五位之介が前に

来て只物言はぬばかりなり。親王御覽じこれは如何にと問はせ給へば。聞さん候此の五歳夜晝鳥に起臥候へば。伴ふものは鳥翼。中にも雁がねの春は歸ると申せども。秋來る迄に忘れもせず。人情の移ること人間に變らず。翼に文を結びふくめ海山越えて往來し。啼く聲知らぬ人間の詞を己が聞知る事。地人に勝れし其のしるし是御覽候へと。翼に付けし一包女の文に。櫛鏡。黄金少々封ぜしを雨にも潤らず持ちたるは。古語に傳へし雁がねの翼の文を目の前に。今見る事の不思議さよと御手を打たせ給ひしが。如何に諸岩。是は女筆の散し書殊にまめく贈物。如何さま味な事さうな聞かまほしと笑ひ給へば。五位之介顔を赤めいやいや。些か戀路に候はず。是は都にて某が添うたる妻女。斯く流人となりし彼後も身を捨て。播州の傍に賤の奉公夫の爲。配所の憂さを助けんとて雁の便りの折ごと

に。筆墨料紙の類迄心をこめし贈物。地女心の神妙さは天運に叶ひ。勅勘を敷され古への五位之介が妻よと妻よと言はせんと。歸參をいつかと待ちし所に不便や今日の此の時が。夫婦の縁の切れ目と成つて候ぞや。詞それを如何にと申すに。元此の女は皇子の執權伊賀の宿禰が娘。君の爲には大怨敵。親ゆゑに貞女の道破る奴にはあらねども。地七人の子はなすとも女に心許すなと。申す世話もありといひ一つは世上の人口。恩愛も執着も情も思も。戀も恨も御大事には代へられず。不便ながらも離別して心清しく義兵を起し。一戦を勵み申すべしさり乍ら。故なく離別と申しなばよもや承引仕らじ。末頼みなき世を見限り自害し死すると最期の文誠しやかに遣しなば。續いて死なんは必定死なうが生きようが歎かうが。重ねて参り逢はばこそ。借老同穴忘れもやらで未來一人待たば待て。生々世々の離別ぞと口には言ひて涙は胸。目をする墨

も筆紙も此の文書けとてこしけるかと。猛き心も練言を思ひかへしつ巻き返し。こまふくと書き結び雁の翼にゆひ付ければ。心あれども鳥類のさすが離別の文とも知らず。急ぎ立ちたる羽風にも落ちよかし落せよかしと。言ひこそはせね心の中。思遣られて親王もステテ御涙にくれ給へば。五位之介も雁がねの霧間に影の見ゆる迄眺めやり。宮に衰笈させ参らせ我が住む里へぞ。三三、歸りける。地松浦の兵藤太宗岡は。所用あつて越後の國へ渡りしが。只今歸着と告げければ五位之介飛んで出で。地コレ頼うだ人の御歸り。若旦那のお歸りなりと呼ははるにぞ。母の尼公も佐用姫もフシ悦び迎ひに出でらるる。地兵藤太歸るとひとしく叔母ぢや人妹。今度の他國に目出度き吉事松浦の家を引起し。昔の長者と立歸る出世のもとこそ出で來れ。地先づ御頂戴候へと首に掛けたる錦の袋。母や妹が額に當て。上座の床の卓に上げア、フシ忝しと

三拜す。地母も妹も打笑ひ何事か知らねども。吉事とあれば嬉しきに早う聞かせてたべとあれば。詞されば候郡には。山彦の皇子朝家を怨み。御謀叛の企あつて諸國の武士を召され候。其の上花人親王の行方知れざれば。多勢の付かざる内近々に軍始つて。忠節の功に従ひ大國小國相應に賜らんと。地御判の令旨を頂戴し罷歸つて候。武運の花の開くる時節弓矢の冥加に叶ひしと。語りも敢ぬに母上は擲有難や忝や。我々は老の身の殊更の事ぞかし。侍盛りの御身をば埋木となすべきか。生世の内に世に立つて姪にも名有る掣を取り。草葉の蔭の父御へも未來の土産に語らんと。明暮願ひしかひありて時節來りし嬉しさよと。皇子の令旨を戴きくイヤコレなう兵藤太。地手勢というても數ならず語らふ人もあらざるか。ア、そこらは油断仕らず。當國には昔より歴々の流人の末。事もあらば功名して名を發せんと。刃金を鳴らす武夫どもは

や道すがら語らひて。今宵是へ集つて着到極め明日は。未明に打立ち申すべしと手配極め置き候。それについてヤイそこな殿取の京雀。汝は上方案内者軍の供に召連るぞ。拾首でも知行になる。萬に一つも運に

叶ひ親王の首取つたれば。地國大名と仰がるる一命かけて働けと。言へども更に返答なし母の尼公も詞につき。チ、さうともく手柄は仕勝の軍の場。大國の主となり如何なる位に昇らうとも胸次第にてなる事ぞお事が此の度功名して。國主とも成るならば幸ひ姫が氣に入りといひ。智に取つて夫婦にせん勇んで向へと勤むれども。わぢく願うて返事もせず。身せせりしてぞゐたりける。地姫は飛立つばかりにて。詞コレそこな者。母上の御詞ぢや興と思ふか。地あのお詞のねをつめて功名極め自らと。夫婦になり今悔られし會稽を。清めんと思ふ我は無いか。あつと申しやエ、ふがひない。詞ム、但し女夫になるがいやぢやの。地つ

い具足着て行つて。掻い首切つて來てたも。様々恥しめ勤むれど。詞ハテそれを人に習はうか掻い斬るは合點なれど。其の内

向ふからこつちの首を掻い斬つて。其の時は名代に死んでくれもなされまい。地損は拙者只一人命にかけがへあらばこそと。フシ舌を。捲いてぞかぶり振る。地尼公聞き給ひエ、見損うたる根性かな。詞汝はもと何處の者とも知らねども。狼狽廻る不便さに庄司殿が扶持し給ひ。殊に姫が不便利。憐みをかくる故妾とても其の通り。此の頃も故郷の妹よ弟よなんどとて。童や女郎を連れ來るア、可愛や便りもあるまじと。痛はり養ひくるるぞや。地せめて恩を知るならば言はずとも御供と。望んで軍に立つてこそ男のきれともいふべけれ。此の内には叶はぬぞ暇をくれる出てうせう。サア姫此方へと立たんとすれば姫は悲しさ遣る方なく。是なうあつと申してたもいのと。氣を急ぐ胸もせく涙。フシ若い心に道理なり。地

兵藤太興をさまし。詞詞費を言はんより藏に入つて物具せん。エ、見るもなかく

地いまくしと背中をした、かどうど踏み。奥を指して入りけるはオクリ無念と、いふも餘りあり。地五位之介立上りム、踏みもせよ笑ひもせよ。其の細首は我等が物不便なるは母や姫。よしそれとても如何せん直に踏ん込み討取らうか。いや、軍勢多語らうたれば。若し仕損じて悪しかりなん先づ君を落さうか。如何と思案する所へ姫走り出で緋り付き。軍に立たずば立たぬ迄よ火の中水の底迄と。言ひし詞を違うかさアど、迄も一所ぞやと。引いて行く手もぎ放し駆け出づれば引止め。振切れば引戻し。昨日にも昨夜にも變る色目けなかりしが。俄に秋風たちけるかヲラけに心得たり。最前よりの顔氣色扱は御身は都にて。親王様の所縁の人かと言はんとなればア、く音高しくと。口に袖を押當てて小聲になつてこれ。詞御身は暫しの情あれば包

ます語る他言せられぬ。我こそ親王の家臣・苦り切つてぞ言ひ放す。姫聞き答め然らば五位之介諸岩といふ者よ。兵藤太とは今日より敵味方になつたれば。御身の縁も是迄ぞや。互に名残は惜しけれども弓矢の習ひと思ひ。恨を殘し給ふなと又駆け出づれば縋りとめ。扱こそ始より斯くと知らせ給ひなば。母にも兄にも語りひて御味方となさんもの。是は言うて歸らぬ事妾は夫婦の契約なれば。たとへ敵でもかたきでも放し給ふな離れじと。覺えず咽ぶ泣聲を餘所に立てじと袖を噛み。ステテ喰ひしばりたる包み泣き。フシわりなくも亦哀れなり。心弱くて叶はじと。諸岩聲を荒らけ。胸エ、聞分けなし愚かなり。幼馴染の本妻さへ。皇子方の者なれば狀通にて縁切つたり。先づ思うても見給へ。合戦すれば御身の兄兵藤太が首を取る。兄を討たせて面白からうか小舅が討たれうか。よしさ程添ひ度くば。御身手につけ兄兵藤太が首取つて來れ。かなはぬ事をくどくと。近頃愚痴の至りなりと

苦り切つてぞ言ひ放す。姫聞き答め然らば五位之介の首取つて見せ申さば。必定夫婦になり給ふな。五位之介も難題の叶はぬ事を言はんと思ひ。ヲ、それも時刻延ばされず。今宵廿日の月出づる迄遅くばならぬが合點か。ハテ、何とせん宵の中兄上の首取らん。裏の妻戸に待受けて聲をかけば出合ひ給へ。其の時引かせぬ合點か。いふにや及ぶ夫婦なり。討たずばこれが一生の暇乞ぞと言ひ捨ててオクリ一間に入れば佐用姫は。地はて没義道な討たれまいやら討たれうやら。ま一度詞も交させぬ。夫の心のむごらしやとステテわつと泣き入り。居たりしが。地夜はしけしけと更け渡る鬼のやうなる兄上が。女の手にて討たれうものか討たでは妹背の縁切る。こは何とせん恨めしや昔が今に至る迄。戀路の憂き目は多けれども兄たる人の首討つて。戀をかなへし例はなし世の言種に指さ、れ。名をや流さん恥かしと。千々に亂るゝ憂き思ひ。ステテ胸も裂

けぬる。ばかりなり。地かゝる所へ母の尼公後の障子をさつと明け。長刀横たへ走り出でテヲ可愛いやないとほしや。和御前が常々あの男に心をかくるなりそぶり。又先からの概略を殘らず立聞したるぞや。子に愚かはなけれども分けて御身は乳の餘り。たつた一人の娘なれば兄には思ひ代へぬぞやれ。氣遣するな兄を討たせて思ふ男に添はせてやらう。調こりや此の長刀は。妾が母より傳はつて嫁入に持たせし重代。和御前が祝言する時の輿の先にと思ひしが。地只今譲るぞ形見にせよ妾は兄が閨に行き。よく寝入らせて相圖には襖を鳴らさん其の時に。障子越しにすばと突き長刀引かず突きながら。五位之介をば呼び寄せよ此の母が面談にて。夫婦の堅めを祝はうぞよ高いも卑いも女の身は。此の道ばかりは氣を強う思ひつめたる男なら。添ひ通さいではわ

に胸も打騒ぎ。親のお慈悲とばかりにて

フシ手を合せて泣きければ。地ヲ、嬉しいは

道理道理。御身が悦ぶ顔ばせが見度いばかりに身をもがく。親の心を思ひやれサア間

は無いぞせくまいぞ。聲ばし立てな音すな

とフシさし足してぞ入り給ふ。地五位之介

諸岩はよも討たんとは思はねども。若しや

と裏の小柴垣妻戸の蔭に立忍べば。東の山

にあかねさしはや月魄ぞあがりける。姫は

見るより心せき南無三寶月は出しほに契約

の。時や過ぎんと氣をつかふ月は次第に差

昇る。如何はせんと行きては戻り。戻りて

は行く。フシ足もさながら地に着かず。地か

あいとばかりにて。フシ身を断はしておはし

ます。地空には月影清々たり庭に諸岩伸び

上り。時分過ぐるといふ氣色門外には軍兵

ども。こゝを明けよと罵る聲思ひは四方身

は一身。心配りに目も眩み火を呑み水を踏

む心。危しとも恐ろしとも。フシ響へて言は

ん方ぞなき。地時に一間の内よりも戸をほ

とくと音づる。すは首尾よしと身を固

め急き上る氣を押静め。長刀取りのべ

障子越しぐつと通して一抉り。手應へして

ぞ突いてけり。姫はがたく。顛ひながら大音

張り上げ。地五位之介諸岩はおはせぬか。

ぎ給ふな人々全く姫が業にあらす。地皆こ

れ妾が心から子子の可愛さに。フシせし事ぞや。

同なう諸岩殿。とつくに名乗り給はば何し

に兄の兵藤太が。皇子に頼まれ参らせん。

地それとは知らずで。せし故皇子方の兄の首、

討つて見せば妹と夫婦の縁を結ばんと。

義理に結つた御難題至極の上の至極なれど

も。假令妹が討つにもせよ。兄も我が子妹

も我が子右の手か左の手か。何れに愚かが

あるべきぞ。兄が命を助け度く妹が望みも

叶へたく。斯くは巧みフシ申せしぞや。世に

數ならぬ此の尼がたとへ病で死したりとて

心強やと消え入りく泣き給へば。家内の人々五位之介。彌猛心の武夫も親子の哀を思ひやり、フシ袖を。絞らぬ者はなし。姫は別ちもなき中に。扱も扱もあぢきなや此の御心と知るならば。夫婦の縁も切るべきものを。誠や親の恩を送るには。生々世々が其の間身を焼き骨を碎いても。報じ難き親の恩送りこそせめ自らは。現在母を手にかけし。後の冥加の如何ならん此の上の御芳志に。今一度御命存らへてたべ母上と。歸らぬ事の悔み泣きフシ見るに。哀ぞまさり。ける母は。涙の玉の緒も。地はや絶えくゝの息の下。なう心強きもいつ迄ぞ。島の夷も山樵も。物のあはれは知るぞかし。武夫なれど都人少しは心も弱れかしと。歎くを見れば諸岩も脆く碎くる涙の瀧。堰き止め兼ねてこれく母御。今よりは姫は我が妻夫なり。心安く成佛あれと高らかに呼ばはれば。母は悦び手を合せ其の一言を聞く迄よ。此の世の思ひ晴れしぞややれ佐用姫。

兄は兄御身は御身。敵と敵との縁組なれば必ず心はづかしきぞ。兄兄弟の因とて二心持つなどよ。憐みてたべ諸岩殿宮仕せよ佐用姫。思ひ置く事となしサア長刀抜いて苦痛を止め。殺してくれと觀念し息を閉ちたる眼にも。名残の涙せきあへず兵藤太は走り出で。今はの母に抱き付き我等が命を助けんため。御命を捨てられし御慈悲の有難さよ。某皇子に與せしも世に出でて母上の御悦びを見んとこそ母は失ひ一人の妹と敵對し。何を勇みに戦せん地さり乍ら。死しては母の情に背く。又存らへては惡皇子に契約變じて武士立たず。思ひ切りたり見切りたり弓切折つて武道を捨て。入道法師の身となつて母の恩を報ずべし。其の時は加勢の人々入道が首取つて皇子に見せて恨を晴らし。皇子の下知に従つて親王と合戦し。分捕生捕功名し頼まれし惡皇子の。本意をも遂けてたべ五位之介は親王の。御味方をかり集め粉骨つくし一軍に。敵を

滅し親王の御運を開き給ふべし。兩方勝負は運次第兵藤太が發心の。一句の戒女これなりと太刀引ん抜いて鬘を。ふつつと切つて投出し悟りきつたる眼にも。弱りし母の顔を見てわつと叫びて伏し轉び。人目もわからず歎きしは惡に強きは善の種とスエテ理すぎて哀なり。地木石ならぬ加勢の武士。下郎の士卒に至るまでフシ鎧の袖を絞りつ。地ツマがる哀を見捨つるも。弓矢取る身の本意ならず。皆親王の御味方と弓を伏せてぞ服しける。母は引取る息ながらチ、悦ばし嬉しやな。生きがひもなき此の尼が命一つを捨てし故。十善天子の御爲と成りける事も子孫の爲。さり乍ら何時迄も名残惜しの子供やと。いふ聲もはや消えくゝと惜むべし惜めども。其のかひ更に七十や八十に近き老の坂。麓の霜とぞ消えにける無常は世上の習ひにて。歎きて歎く道ならずと。各いさめ親王を奥の蒲間に御供の。鎧の袖を連ぬるも親子誠の心より。家に

く緋織や譽は、朽ちぬ金札名を卯の花に伏
繩目。白絲織しら〜と。東明念く小櫻の
盛りの。春ぞ頼もしき。

第三

地三因佛性の中には縁因殊に量りなき。佛
の縁やいつとなく此の日の本に廣まりて。

や、袈裟衣播磨湯法の威光も高砂の。尾上
の松の下宿も石上樹下の戒めと。心止めず
行ひし。兵藤太入道が發起心こそゆかしけ
れ。地世に絆されぬ信力力の佛意にや適ひけ
ん。不思議の瑞夢を感じて此の海の底より
も。希代の釣鐘波に打たれて顯れしを。框
を入れ繩を着けさし來る潮の時を待ち。波
のまに〜引上ぐれば凡そ七十餘日に。波
打際迄上けしかども。それより此方は潮の
力離れし故。一人自力に叶ひ難く。往來の
人に勸進し再び日本の寶となさんと思ひ立
つ。大道念こそ殊勝なれ。地かくとも知
らで五位之介諸岩は。西國の武士を語らは
んと親王も佐用姫も。賤の童や女童の里通

ひにもてなし。降りみ降らずみ濡れみ乾き
み。隙なき袖を暫しとてオクリ晴間をへ松の
下蔭に。フシ立寄り給へば。地藤太入道見參
らせヤア是は我が君か。五位殿か妹か兄上
様か珍しやスエチこれは。〜とばかりなり。

地親王御覽じ邪法盛んの世の中に。信心深
き大道心頼もしさよと宣へば。入道も涙
を流し。愚僧が母こそ善知識なれ佛なれ。
これ此の鐘を御覽候へ。不思議の瑞夢によ
つて是迄は引上げ候へども。是よりは潮の
差引なき故に。一力に叶ひがたく諸旦を勤
め候が。地母が死して見せずんば發心も致
すまじ。發心せずばかゝる奇特も見申さじ。
廣大無邊の親の思いつかは報じ申すべきと
涙を流し語りければ。妹の佐用姫は又思出
す憂き涙。フシ月日たつ程身にぞしむ。親王
釣鐘の銘を御覽じ。御手を打つて禮拜あり。
阿アラ尊や此の鐘は。先帝の御時經論佛像
諸共に。異朝より渡されしを筑紫の海へ捨
てられし。天竺祇園精舎の鐘なるぞや。地

此の鐘の濫觴は龍宮の紫金を取つて。世尊
火坑三昧の踏輪を以て。鑄たて給ひし鐘の
聲。此の響には九十五種の外道。通力失せ
て地に墮ちたるとの縁起なり。再び湧出し
給ふ事塵が運を開くべき。時近づけり普賢
力をこらし引上げ。再興あれと宣へば入道
佐用姫諸岩も。フシ地にひれ伏して禮拜す。

地かゝる所に筑紫大名と思はれて。先を拂
つて來りける入道下部が袖をひかへ。入道
方ざふと問ひければ。是は豊後の國眞野の
長者殿。御息女玉世の姫君御在京の所に。
上方に騒動の由聞及び。御迎ひのため御上
京候處に。姫君は恙なく御歸りの由告け來
り。長者殿にも是よりお歸りなりと。地語ら
間に先備の供馬引馬乗換へお葛籠馬。七つ
道具を揃へしはけにも美々しき。三三見物
なり。地入道慰せず乗物の前に立ち。阿そ
も〜野釋は此の尾上の松の下蔭に。一夏
を送る道心なるが。或夜此の海底に涅槃經
の四句の文。梵音聲にて唱ふるとあらたに

靈夢を感じ。果して此の釣鐘を見出せり。

是は天竺祇園精舎の寶藏にして今此の三界に並びも波の立居に任せ。是迄引寄せ

侍りしに。貧僧の力に及ばず。願はくは多少を論ぜず。扶助の思ひをコハリ勵まし給へ。

佛説誤りなくんば。現世にては増益壽命。一紙變じて衆寶の莊嚴となり。半紙却つて紫塵。金色の光明と願れ未來。成佛

べからず。勸進。とこそ勧めけれ。地長者乗物より飛んで下り奇妙の寶を拜み申す。

。前年我等が本國の海へ捨てられ。其の所を鐘の岬と申すぞや。地はやく引上げ

此の所に鐘樓を建て。尾上の鐘と名付け奉らん。幸ひ國許に豐國國師とて。學業目

出度き唐僧あり。地供養の導師に頼むべし金銀は入り次第。それくとありければ承

つて荷物より。金銀烏目山の如く濱邊に積めば。入道悦び衣をからけ近邊近郷ふれ歩

く。舟長馬方百姓町人柴刈木樵。綱曳舟曳鹽燒蠶人老若男女數千人。刹那が間に馳せ

集まる入道下知してサア錢金は搦み取りはやく曳けといふより早く。我もくと繩を取りゑいやく。ゑいやくと引汐に。つれて沖へは出づれども磯の方へは寄らざりけり。理かな人間の眼にこそ見えね外道の形。鐘の上に突立つて。人力を奪取り

奈落に入れとぞ抑へける。親王かくと知り給ひ長者の前に蹲ひ。近頃差出がましう候へども。日本國が集つても。財寶費ゆるばかりにて中々動き候まじ。地童に仰付けら

れば一節の木遣にて。人數入らずに山へなりとも上げ申さんと。言はせも果てず浦人どもばらくと立懸り。同ヤア生小懸しき丁

稚めかな。我々を仕落して己れ一人が錢取らう。ヤア暖かな糖童。それ打殺せとつと寄る諸君入道立塞がり。此の方の連なるぞ棒をあてたら撫斬りと。きつば廻して怒

れどもそいつ共に撲ち殺せ。片端海へはめてのけと。口々に罵るはフシ。是も外道の障礙なり。長者大音あけ鎮まれく。して又

童は何の覺えあつて。斯くはいふぞとありければ。されば候事も愚かや釣鐘の。功德廣大なること詞にも及ばれず。釋尊先生此の鐘を鳴らして大法を得給ふによつて。槌

鐘告四方と御經にも説かれたり。此の聲耳に入る時は。百八煩惱無數の罪障を消滅す。又惡魔外道は人界の。罪障煩惱を悦んで。此の鐘の響に外道の通力絶ゆる故。地是を憂へて此の鐘を。下界へ取つて沈めんため

外道の障礙疑ひなし。されば罪障消滅の經文を。木遣にして引くならば。一曳には惡魔を拂ひ。二曳には外道を退け進退心の儘なること。掌に候と。フシ言説正しく仰

せける。地浦人ども舌を捲き坊主もどきの悴イヤ此奴只者ならず。皇子様よりお尋ねの親王とやらんに紛ひなし。搦めよ縛れと

どよめきはフシ危ふかりける次第なり。地長者も不審をたて。いかさま年にも足らで斯様の事は何として覺えしぞ。先づ何者なるぞと問ひければ五位之介おつ取つて。イヤ

鐘を拂ひ。二曳には外道を退け進退心の儘なること。掌に候と。フシ言説正しく仰せける。地浦人ども舌を捲き坊主もどきの悴イヤ此奴只者ならず。皇子様よりお尋ねの親王とやらんに紛ひなし。搦めよ縛れと

どよめきはフシ危ふかりける次第なり。地長者も不審をたて。いかさま年にも足らで斯様の事は何として覺えしぞ。先づ何者なるぞと問ひければ五位之介おつ取つて。イヤ

鐘を拂ひ。二曳には外道を退け進退心の儘なること。掌に候と。フシ言説正しく仰せける。地浦人ども舌を捲き坊主もどきの悴イヤ此奴只者ならず。皇子様よりお尋ねの親王とやらんに紛ひなし。搦めよ縛れと

どよめきはフシ危ふかりける次第なり。地長者も不審をたて。いかさま年にも足らで斯様の事は何として覺えしぞ。先づ何者なるぞと問ひければ五位之介おつ取つて。イヤ

鐘を拂ひ。二曳には外道を退け進退心の儘なること。掌に候と。フシ言説正しく仰せける。地浦人ども舌を捲き坊主もどきの悴イヤ此奴只者ならず。皇子様よりお尋ねの親王とやらんに紛ひなし。搦めよ縛れと

どよめきはフシ危ふかりける次第なり。地長者も不審をたて。いかさま年にも足らで斯様の事は何として覺えしぞ。先づ何者なるぞと問ひければ五位之介おつ取つて。イヤ

鐘を拂ひ。二曳には外道を退け進退心の儘なること。掌に候と。フシ言説正しく仰せける。地浦人ども舌を捲き坊主もどきの悴イヤ此奴只者ならず。皇子様よりお尋ねの親王とやらんに紛ひなし。搦めよ縛れと

どよめきはフシ危ふかりける次第なり。地長者も不審をたて。いかさま年にも足らで斯様の事は何として覺えしぞ。先づ何者なるぞと問ひければ五位之介おつ取つて。イヤ

名もなき土民にて候が。彼は幼少より都の學者へ奉公に出せしが。生れついて覺え強く。一度聽いては一生忘れぬ器用者。却つてそれが仇となり。小癩者として又しては。人に憎まれ候と誠しやかに申しける。長者

悦び是も佛の縁ぞかし。何と我にくれまいか。奉公次第後々は引上げてくれうとあれば。地元より姫の好はあり幸ひなりと五位之介。有難き御詞兎も角もとぞ受けにける。長者いよく悦び名をば山路と改めて。

今日よりは主従ぞやサア奉公始めに此の鐘を。山路が木遣で引上げよ承つて候と。聞かに方々此の山路が。諸行無常と音頭をあけは是生滅法と付けて曳け。生滅滅已といふ時は寂滅爲樂と唱へて曳け。曳けやくの聲の内邪法の雲は正法の。風に消えつつ

高砂の尾上の鐘の自ら。帆かけし舟の如くにて既に。鐘樓ぞ三重一醫器作りし罪も消えぬべし。フシつくりし罪の。重たきを。重たき木とも割木とも。わりなやわられ。

フシ碎かれもせで。鐘の撞木と我と我がエテ身を削らるゝ。憂きつとめフシ今からかと待宵は。鈍のたはれ男遅くとも睦言切れて曉の。往ねとの鐘のけはしけに。鳴れとは誰に頼まれしそれも恨みも昔にて。

今は鳴るとも響くとも。まゝよおのれが尾上の松。鐘の供養に参るらん。是は此の國の傍に。下司奉公の勤を致す飯炊の女にて候。世は様々の中にも宮仕へ程辛いものあらばこそ。主に賣つたる身と思へば晝は日

がな一日。手足の乾く際もなく働けば働く程。休めとも言はばこそ褒めそやされてあの女子は。律義で達者で。心のまめなまめ者よ豆腐賣が通るはそりや夕飯を。地やうく仕舞うて洗足すりや。はや入相のかね付ける間もあるにこそ小隅へ寄つて。眠ろ

とすれば夜食をせよと夕飯の。まだ間もないと思へども主と病に肩骨も。おればつかりが奉公か人もすりやこそ挿鉢に。此の挿木の太さは太うても慇ばつかり。人に物を

思はせて身體倒しと投げ放れば。當つてかはらけかけ燈臺元のが増しぢや先の季から。夜ぶかに起きて今宵も月は八つぢやが。夜半の鐘は鳴らぬか憎やつらや腹立や。鳴らずば破れよ碎けよかしとフシ鐘を憎まぬ夜半もなし。それさへあるに。曉は。

地ま些と思ふ間に阿房鳥のがあがあは。何時知らずよ烏羽玉のまだ夜は深いと思ふ間に。耳につきぬく夜明けの鐘これは寝る間もあら憎や。憎やくとむくろ腹むくおきく鐘鳴る方を。フシ睨みつけ。地敵の様に怒りをなし。早いにつけ遅いにつけ。鐘をうとみし其の罪は五逆罪にもまさりなん。聞けば此の尾上の渚にあらたな撞鐘あらはれ。唐の尊い聖の供養ありと承り。鐘の供養に参らばやと思ひ候。月

は程なく入りしほの。月は程なく入りしほの。煙滿ち来るフシ小松原。木蔭を漏る初雪の斑に積むも先づ消えて。それより重き木綿物オツリきならし。衣つまなしにか

ひなき命いつ迄か。かく長々し山鳥の、ッシ尾上の。松にぞ着きにけり。供養の庭には垣結び渡し御簾屏風。幕の内にぞ人音す。まだ早がりつと悦び實戸に入らんとす。ッキ折から佐用姫出合せこれく今日の供養には。女の參詣禁制とこそ候ひつれ。あら不沙汰の僧達や。其處退き給へと押出し、ッシ編戸を。はたと押立つる。木夫地いやなう鐘の供養に參ること女とてな厭ひ給ひそ。よし禁制ならば禁制ならめ。さいふ御身も女ならずや。ッキいや自らは此の内に夫のあれば苦しからず。外の女は叶はぬとよ。木夫調に此の内に夫ありとは坊主が女房を地勿體なや信心もさめたれど女が女に言ひ負けて。悄悄とは戻られじ是非に入つて聽聞せん。ッキ我がづくになれば猶入れじ。木夫いるや。二入入野の鹿垣も、ッシ揃ぐばかりに押合へば。地藤太入道走り出で。人こそ見れと佐用姫を幕の内にぞ入れにける。木夫調これ申し法師儀。御秘藏儀を見ましたが美

しさどうも言へませぬ。女同士さへ氣の毒な。地あんなおか様持ちながら。あつたら御身を墨染に、ッシ惜しい事やと仰せける。ッキ調あらいまくし大道心の清僧が妻を具してよいものか。愚僧が傍輩の女房なるはと言ひければ。木夫扱は傍輩様のつれ合かや。仕合や羨しや我等は常の俗よりも。只坊様がいとしようて。あはれ一期の思ひ出に頭の丸い坊様を。いとしがつたりがられたり其のくせ情が深いぞい。斯うした供養の所へも頭の丸い御人が。つい這入らせて下んすと、ッシたしなませてぞ氣を持たす。ッキ地藤太も上手にしかけられ待ちやや。談合して來うと。走り入つてこれ五位之介。調某が在俗の思ひ者が來つたり。一人などは苦しからじ聽聞させてくれまいか。木夫いや一人が二人三人それは苦しかるまいが。沙門の思ひ者とは破戒の僧よと申しける。ッキム、然らば御分の佐用姫はなんと。木夫是は辭事某は。敵の爲に衣をこそ着たれ。

頭巾の下迄剃りはせぬ。ッキ我は頭もそりはしの。二人いたはしければ。見ず知らず。聞かず顔をば咎めじと、ッシ實戸を開きて通しけり。互に見しや面影のそれぞと夫は忍ぶ草。木夫我は何しに忘れ草羽を並べし鶴の。五位之介と見付けしよりは是はと泣いて抱き付く。振り放されてかつばと伏しねながら裳裾をしつかと取り。逃げんと引いて廻れども。放さず轉び引きすられスエテ聲をばかりの。叫び泣き、ッキ目も當て。られず痛はしし。ッキ地思ひがけなき五位之介これ狂人め。調武士の妻ともあるべき身が見苦しき振舞。諸人の見る目もあるぞかし言ふ事あらば重ねて聞かん。見苦しき歸れといへば。木夫地女房涙に咽びながらエ、見苦しとは其方の事よ。人にこそよれ五位之介諸岩といはれし弓取の。偽りいひて今又能うは人らしう。女房に面は向けらるる。調御身流人となり給ひ島にての憂き身の程。雁の翼の文ごと聞けども我が力にて。貢

ぐべきやうなき故になう口惜しや。唐にはありもやすらん日本にはまだ例なき傾城といふ物に騙し賣られて室の津の。室君といはれしを我が身の事とは知り給はじ。よしや因果も假の業夫の名をも我が身をも。穢さじ捨てじ汚さじとそもや勤の始めより。男は何千何百やら數も限りも白露の。下紐解いた。フシ事はなし。されども勤が悪いとも床あしらひが悪いとも。浮名立てず一日も客を落さぬ辛抱は。皆誰が爲ぞそれのみか着衣裳腰の廻り迄。あれをがな我が夫に是をも島の我が夫にと。餘所のを見るも罪作りステ盗まぬばかりに求め出し。雁の翼の重る迄送りし物は數知らず。されども色にも出されず寝た間ばかりを我が物と。樂に歎くが樂しみにて一度は逢はんと思ひし所に。これ此の雁がねの名残の文。世を見限つて自害して今日死ぬるとの文章。見しよりはつと氣も落ちて晝も涙夜も涙。起臥立居行き戻り涙に絞り身も枯れて。

里の住居を追出され伴ふ者は雁がねの。鳥類ながら共泣きに泣死にせし此の羽も。夫婦が中の形見ぞと持ちし片羽は思ひ羽の。片羽は餘所にもちりばの鳥類程な根性を。せめて持つても見よかして小柄を取つて引きほどき。叩き付け喰付きし齒莖の血汐血の涙。フシ墨の袂も染めけらし。ワキも五位之介もてあつかひ。發心の身となつたれば佛の眞似する出家ならずや。佛身より血を出す罪人め。此處を放せと突き退くる。木夫なに佛とや心の多い佛様に。髣髴をせんと抱き付く。ワキエ、憎くき女め夫に恥を與へるか。したゝかに取つて投げ。腰も折れよと踏み付けて。フシ溜息。ついてぞ居たりける。木夫女房むつくと起上り霞のやうなる涙を流し。齒がみをなして以前の女それにて聞け。幾夜か我に仇臥の憂き目をかけて我が夫の。肌を荒す木枯の森の木の葉のかれぐに。なりしは己れ故なるぞやサア女

生七生五百生。此の怨は盡きすまじ。盡きせじ晴れじ忘れじ止まじと。舌早に。泣いつ怒りつ恨みつ侘びつ。色ある顔忽に。目尻目頭肉落ちて。フシ涙は瀧の如くなり。ワキ諸岩聲を荒らけ。畢竟己れは傾城なれば飽いた時は念頃切る。サア傾城念頃きる。挨拶切つたが何とと言へば。イヤくくく。御身と我といつ傾城にていつ逢うた。幼馴染の夫婦なり。夫婦に向つて念頃のいや挨拶を切らうとは。ワキム、扱は夫婦に極つたな。木夫ヲ事新らしい御身は男我は妻。ワキム、面白しく。氣に入らぬ女房を夫が去るに言分なし。點を打つ人もないサア。夫婦なれば夫が去る。ム、何と我を去る。ワキチ、去る。木夫さる。ワキさる。二人驚さる程に。尾上の鐘の。同地月落ち鳥啼いて霜雪天に。満ちじほ程なく此の浦波の。江村の漁火愁に對して人々眠ればよき隙ぞと。立舞ふやうにて狙ひ寄つて撞かんとせしが。木夫地思へば鐘さへ恨しや

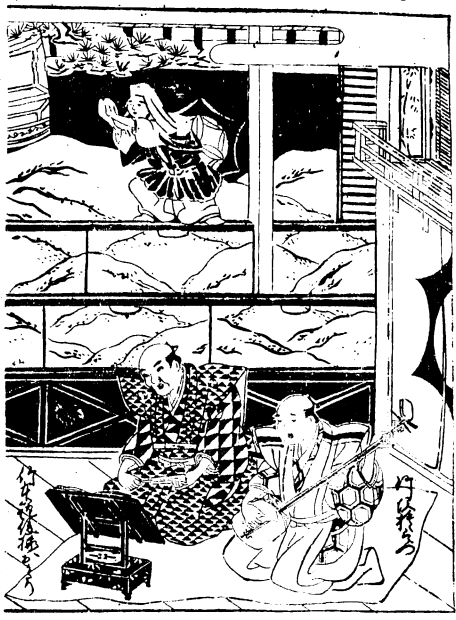
とて。龍頭に手をかけ飛ぶとぞ見えし。引
つかづきてぞ。フシ失せにける。ワキ地鐘の
落ちたる其の響天地も崩るるばかりにて。
豊國師御弟子達驚き騒ぎ何事やらんと尋
ね給へば。人々包まんやうもなく有の儘に
ぞ申しける。國師聞き給ひ。詞言語道斷斯
様の事を思ひてこそ。女人禁制とは申しつ
れ。總じて鐘の供養に女人を警むる因縁は
そも。天地未だ開けざる昔。東北の隅に當
つて悪風を吐く虎あり。其の名を贖野虎と
名付く。此の虎晝の午の刻より亥の刻迄。
悪風を吹出し人の性氣を奪ふ惡虎なり。又
西南の隅に飢渴申といへる猿あつて。子の
刻より巳の刻迄毒氣を吹きかけ人生をたつ
佛是を悲しみ給ひ。鐘の響に虎猿の惡魔
を抑へん其の爲に。其の時々の鐘の數。午
に九つ未に八つ。申酉戌に七六。五。亥の刻
迄に四つ撞けば。いづれも虎に當るなり。
夜半の子より九つめ。猿にあたつて丑寅卯。
辰巳の刻に至る迄。八つ七つ六つ五つ。是

も四つの時の數いづれも猿にあたる。故を
以て虎猿二つの惡魔障。響に恐れて障礙を
なす事能はず。かるが故に彼の魔王。世界
の鐘を絶やさんため。供養の庭には女人と
變化立入つて。獸を降らし火炎を吹きかけ。
釣鐘を奪ひ失ふと傳へたり。なんほう恐ろ
しき事にては無きかと地語り給へば人々は。
フシ身の毛を立ててぞ怖れける。地國師重ね
て宣ふは。是はそれには引きかへて戀慕の
恨み執着の一念。斯くては後世も浮み難し。
法師が多年の修行も斯様の時の爲ぞかし。
涯分祈つて彼の女人をも助け鐘を鐘樓へ上
ぐべしと。五大明王五龍神の秘法を行ひ三
重に給ひける。地山盡きて波に入り海かへつ
て高砂の。眞砂の數は盡くるとも佛の誓願
盡くべきかと。皆一同に聲を上げ東方に降
三世明王。南方に軍荼利夜叉明王。北方に金
剛夜叉明王中央に大日大聖不動。龔謀三曼
多囉日羅南。旋多摩訶囉遮那。コハリ婆婆多
耶咩多囉吒干輪。聽我說者得大智惠。知我

心者即身成佛と。誠の道に導く上は。何の
恨みか有明の撞鐘こそ。爾すはく動くぞ
祈れた。く引けやてん手に千手の陀羅
尼。不動の四句の偈明王の火焰の。黑煙を
立ててぞ祈りける。祈り祈られ撞かねど此
の鐘響き出で。引かねど此の鐘躍るとぞ見
えし。程なく鐘樓に引上げたり。あれ見よ
蛇體は顯れたり引
鐘入の段
フシ涙川戀の氷に閉ぢられて。身を切り碎
く思ひより憂き川竹の憂きふしを。せめて
聞もる月だにも。ヌエテあはれ枕に訪ひも來
ず。我一人寢となつたるぞや。心づくしの
年月は。幾百夜をか泣き明かし。凌ぎ明か
すも。此の身一つの報の罪や。かずくの
岩もる水の湧き返り。胸に漲る。戀慕の熱
湯鐵の鎖となつて。戀につながら恨にか
らまれ包むに餘りてほに出でそめても。ひ
とり立つたる一本薄地。嫉みの露の重たさよ
。嫉みも仇も打拂ひ懺悔に罪を滅さば。迷

ひの雲は晴れぬべし 夫恨みは濱の真砂に
 て語ると更に盡きすまじ ワキ恐ろしの目許
 や髻を取つて引留むる引夫夫亂れし髻も。ワキ
 亂るゝ我が心も 二人流れの女の懺悔の有
 様これ御覽ぜよ。あさましや。夫夫藍花の外
 には松ばかり。憂きが友には酒ばかり。暮
 つて月の足。只我をのみ追ひ來るか。科
 なき空を恨 散るらん フシ情の花や。散りぬらん。地仇
 みにし。此 此の仇花ならば。餘所に散るとも心の匂
 の罪科の懺 は此の身に残つて打たるるとも。離れじ
 悔の涙積つ 姿はこゝに撞鐘の龍頭に立つたる龍頭の。
 て末に川と 兩眼拉ぎの祈の聲も。思ふ中をばよもさけ
 成り。いく じ。二人連れ行く妹背の道にはコハリ 東南西
 せくの瀬 北八面玲瓏と明かに。天に昇らば非想非々
 越しにも。 想天迄追つかけ。扱又大地の底に入るとも
 辛さ果てな 一面八丈の淨玻璃の鏡に影の立ち添ふ如く
 き流れの苦 に。附き纏つてくるくくくくくるわに
 しみ。フシい 忽ち地獄の圍み。邪淫の角の高塀 地長塀ッ
 つの世に。 シ大門變じて鐵門の。地忍び返しは劍の山。
 誰が始めけ 戀慕の鋒先らん。く。蘭奢の空炷烟と
 ん。地天竺 なつて。身はすみがまと焦熱の煙がへしは

佛の御國には。銜寶女色と名付け唐の帝の
 色好み。手いけの魚と水深き。妹背に國も
 傾きて名を傾國と今の世も。人の心を和く
 和國にながれ立花の。花の情の契と書
 明用天泉人鑑





も、ッシ皆紅角を振立て鱗をならしし夫を目がけて、鐘に向つて吐く息は、ッシ猛火となつて立昇り。地今より後は夫婦妹背の守神ぞと、いふ聲残つて雲を捲き立て捲き下し。鱗變じて金色の花を降らして其の姿、虚空に跨り入りにけり尾上の鐘の鳴り渡り、響傳へて是よりも、世に始まりし傾城を、太夫と名付け初めけるも尾上の、松の謂れかや。

第四

大地を蹴立て、仇と情と二張の弓の矢先を折らんと怒り、謹請東、謹請西、方青龍、清淨謹請西方白體白龍、謹請中央黃體黃龍、一、三千大千世界の恒沙の龍王、哀憫納受。哀憫頻んの砌なればいづくに恨のあるべきぞと、祈り祈られかつばと轉ぶと、地見えけるが、甘露餘りの大蛇となつて

誰ゆゑぞや。情は却つて仇となり共に重ねし比翼の翼。刃の鐵杖猛火の羽風追つ立て。く引つ立て行かん來れとこそ呼ぶも叫ぶも恨のこだま。通れがた野の狩場の吹雪に。そら怖ろしや空誓文の神罰。佛罰。皆身の上に降りかゝる。涙は血汐ナホス雪霜

をなし。面色變つて見えたりけり。謹請東、方青龍、清淨謹請西方白體白龍、謹請中央黃體黃龍、一、三千大千世界の恒沙の龍王、哀憫納受。哀憫頻んの砌なればいづくに恨のあるべきぞと、祈り祈られかつばと轉ぶと、地見えけるが、甘露餘りの大蛇となつて

紫洞賤の奴と成り給ふと。ほの聞きしより、險非遣使。急ぎ筑紫に便船し、ッシ豊後の府内に着きにけり。地眞野の長者の館を見れば山より海邊に打續き、棟門。多く立並べ出で入る人迄も。寂光の都喜見城の。樂しみもかくやとステエ思ふばかりの景色なり。奥の方に人音して。御今日は東の御花園。地、殘菊の御酒宴掃除の衆と段々に。呼びつぎつぎであつといふ聲の下より下部の者ども。箆水桶數知らず。列を揃へて運びしは

フシありのすさみに異らず。勝舟笠を取つてこれ申し。國ちと御尋ね申す事のあり。さいつ頃お館へ都者の小冠者の。御奉公に出でし者を教へたべとぞ申しける。下人ども打笑ひ。ハテ風をつかまへるやうなとでも無い問ひ様かな。都方の童とばかりいうて埒があくものか。當國他國都者上中下の奉公人何萬人あるとも知れ難し。其の上面々の役にて。傍輩の内にさへ近付でない者ばつかり。但し名は何といふぞ。若し名を云うて尋ぬるならば。地上邸下邸山邸河邸。卅六ヶ所のお屋敷を。百日ばかり尋ねたらどこぞでは知れうといふ。詞イヤ爰にての名も存せず。併し牛飼か草刈か。いかさま野方の御奉公と承りぬと云ひければ。ハテいよく當どもない事。百間長屋の鋤鉄五六千もあらうが。朝誰が持つて出て晩に誰が持つて来るやらん生馬ばかりも千四百五五それに飼ふ秣なれば。草刈の數知れず誠尋ね逢ひ度くばまあ一年も逗留して。ゆ

るりと尋ねやと口々にフシ笑うてこそは入りなけれ。實にや日本の月蓋と聞きしはさる事ぞかし。扱夥しく。さり乍ら我が念力逢ひ奉らぬ事あらじと。館の廻りを盤桓と立ち休。らひてぞ三重へうかひける。フシおきまどはせる。初霜の。籬の菊の名残として。長者夫婦玉世の姫月雪蟲に花紅葉。絲竹酒は常なれば。フシ五樂樓と名付けたる。欄干高く軒長き流に映る築山も。錦を飾りてもてなせども姫君の心には。親王の御事のみスエテ思ひ。重なる箱の菊フシ花もろ。共に打ちしほみ。欄干に立ちつくし其方の空をほつしりと。打咳きて面瘦せて。醫者の手を置く物思ひオクリ氣むつめかしけにいたはしや。フシ斯かる所に。地蕪る外道の蕭殺の形邪見風の嵐を吐けば。柗木の間にばらばらばらばらばらと吹落ちて母上の。五體にぞつと浸み渡れば。忽ち悶絶顛倒として息も果敢なく成り給ふ。スエテ長者姫君女房達これはこれはと驚き騒ぎ藥

さまへ看病すればスエテやうくに出出で給ひしが。外道の惡念魂に入替りなう。曲もなや玉世の姫。御身とは繼しき中されども妾に本子なければ。憎かるべきやうな底意もなう育てしに。御身は萬にわけ隔て父御へはさもなく。母の親に何事も包み給ふは恨みなり。明暮それが苦になりて胸の癪がさとのほり。今のやうなる憂き目を見る怨めしさよとありければ。姫君胸はつぶるれど扱も悲しき御詞。乳房のうちよりお情にて人と成り。何しに粗略に存ずべきよしなき事の御耳へ。入るゝ者あらばそれは人のいひなしと。思召して給はれとッシ涙を。流して申さるゝ。地いやくさな評ひ給ひそ。調山彦の皇子様より女御に召されん。后に立てんなんとて度々召しの下の故。地かゝる貴人と縁を組み。長者の家の名を上げん嬉しさに。意見をすれども縁付はいやといふ。詞いやといふも道理かな其のお腹は何事ぞ。長々都に逗留して其間

の仕事か。ヲ、よい仕事めさつたの。地な
ぜさうした事あらば母には密ひそと知らせぬぞ
。何とこれでも隔てぬか俺や無理は言はぬ。

是が嘘うそならお腹見しや。ちつとさうもおじ
やるまいと、フシ怒り恥しめ申さるゝ。地姫

君はつと血も上り。胸もだくくひつたり
とフシ汗は肌はだを浸ひたしけり。調長者横手を打

つて。始めて聞いて驚きたり。百島太夫を
付け置きしに其のかひもなく。長者が娘が

父無子てなしこを孕んでなんと一分立つものぞ。地
先祖子孫の恥辱なり。皆太夫めが無沙汰ゆ

ゑ。此の度受領の御禮に又都へ上せしが。
道中迄檢使を立て其奴に腹を切らせよ。さ

て又姫が懐妊つがな月重つては世間の聞え。恥
を招くといふものなり。胎内にて失ひはや

く皇子へ奉らん。調抑此の妙藥めいやく華陀わだが秘
書ひしょに顯あらわしたり。則ち其の藥といつば。牛膝ぎうせき

あかりも廿日草鼠の尾花末摘花。此の草を
探つて満月の夜の露を搾しぼつて與ふるに。形

碎けて消ゆるとは見えたれども。我が朝に

て此の草を見知らず。今度某播州尾上の浦
より連れ來たる。草刈の山路さんろこそ知つたら

め。地尋ねて見よ。承ると女房達御前をこ
そ立ちにけれ。姫君父に抱かかきつきたとへ此

の子は言ふに及ばず。我共に殺さるとも皇
子の方へは許してたべとスエテ泣叫なみび給ふ處

へ。草刈の山路右の草を見知り候と申し上
ぐれば。長者聞き給ひ然らば御身内山みまの月

見堂へ召具し。密ひそかに計らひ胎内の子を。
湯とも水ともなして後目出度く歸り給ふべ

し。幸ひ今夜満月なり。早やとく用意と宣
ひてオクリ奥にへ誘ひ入り給ふ。地斯くて門

前に人數多歴々たる侍。花人親王の御使者
なりと案内す。調長者威儀を改めて。一間ひま

に請じ入れければ使者口上を述べけるは。
某は親王の執權檢非違使勝舟と申す者。然

れば今度親王御連を開き再び都へ入り給ふ
によつて。姫君の御事御息所みよせに差上げ給は

ば。御感あるべきとの仰。御同心に於ては
直すに迎ひ申せとて。此の檢非違使參つたり

親王帝位に即き給へば姫君は后きさきたり。然れ
ば長者殿は御外戚ごぐわいせき。此の上の本望あらじ珍

重さよとぞ述べにける。長者悦び冥加に餘
る仰かな。地さり乍ら先づ姫に申し聞せ追付おつ

けお請仕らん。先づそれ御茶御菓子と、フシ
もてなし奥にぞ入り給ふ。地檢非違使勝舟

は生駒の禰ね宜がものくしく。長者へ行き
しは心得ずと跡を暮うて門に入り。屏中門へんちゆうもん

よりさし覗けば檢非違使勝舟と我が名を言
はれて酒肴馳走に逢うてぞ居たりける。扱

こそ痴者おろち好き時節と立部たちぶの蔭に寄り。懐中
の鬢鏡杖びんかきょうざうに結び付け。疊紙たうみを幣へいに切りかけ

煙草入打拂ひ。オクリ烏帽子にへ折つて打被うひ
き。地廣庭さして入りければ。宿禰はそれ

と見るよりも氣味悪るさうに顔を振り、フシ
聞かぬ顔して居たりける。調これや此方こなたへ

御免ならう。是はお鹿島香取かしまかんとりより罷り出で
た事觸れでござりや申す。御神託の通り一

言こと一句偽りはござない。無い事も有るやう
に足らぬ所は取りつけ引つけ。國々所々

を觸れて通る事觸れて御座りや申す總じて
お鹿島と申すには上の禰宜が卅三人。中の
禰宜が卅三人。かす禰宜が卅三人。合せて
九十九人の禰宜が正月七日に神前に於て。

おやおつかない起請を書く其の起請の文言
に。嘘をつくまい慾をせまいくれぬ物は取
るまい。又くれる物なら辭儀もせまいなん
ほなりとも貰はうと申す誓紙を書いて。六
十六國を觸れて通るから偽りは御座りやな
い。此の度お鹿島の御寶殿よりでつかちけ
ない光り物が筑紫の方へ飛び出で。お前の
罪が八文字に開け神前の白洲が八角に割れ
て。神馬のお馬の四足に土を付けて大汗をか
いて御座ある。さるによつて禰宜神主是を
歎き。神馬のお馬に三石六斗の豆を食はせ
て神樂の太鼓を打たせ。御湯を捧けて七座
の物忌み七日のおこたれとござある。時に
お鹿島大明神氏子を不便と思召して御託宣
がござやり申す。當年は乙酉春から今迄氏
子繁昌。ゆるりくわんとこの梢に酉の年の

萬の鳥が羽を休める如く。十分の世の中な
れども爰に一つの大事がある。娘を持つた
お方は御用心なされ。蒙古高勾麗が以ての
外勢が強うなつて此の界へ渡つて。或時は
美しい稚兒若衆となつて誑かし。或時は貴

人高人の執權御使などと偽つて。女御に
上けい后に立てよなどと申しておやおつか
ない偽り。跡からはける化け頭親は是を誠
と思ひ娘を手放すものならば。あつたら娘
も身代もむくりこくり取られん事不便なり
との御託宣。嘘も飾りも申さないお疑やり
申すな。出るまゝ八百萬神の御力のすわつ
たナホス事觸れ。地無上神靈。神道加持と
を申しける。地長者元より遠國育ち正直
路の老人なれば。心にやかゝりけん奥より
立出で。先づ此の度は御返事申されず。重
ねての御相談御縁次第と申さるる。宿禰
氣色を損じこれ。物取り鳩のかひの偽りに
嚇され。左様の御返事此の檢非違使はえ申
さじ。どうぞ身が一分の立つ様な御返事を

めされ。返事が悪いと長者殿の娘の代りに
和主の首を連れて歸るサア。首か姪かどち
らでも。素手では歸らぬ思案せよと太刀の
柄に手をかくる。長者もさすが物師にいて
やこれ檢非違使殿とやら。娘も我等が秘藏
の子首も秘藏の首なれば。渡さうとは申し

難し。但し貴殿の勝手次第。取られうば取
つて歸られよと、ッシ中々ゆすりは喰はざり
けり。地宿禰も止り付かざればヲ、身が勝
手なら首取らんと。飛んでかゝるを檢非違
使飛び上つて立塞り。御ヤア騒ぐまいゆる
ぐまい。地揺ぐともよもや抜けじの要石。
鹿島の事觸れあらん限りはコリヤ宿禰。
見知りごしに檢非違使とは今に始めぬのぶ
といやつ。これこれ長者。彼奴は皇子の家
臣生駒の宿禰といふ大盗人。誠の檢非違
使勝舟は某なり。地こゝを我に任せよと打
つてかゝれば下人ども。宿禰を圍うて勝舟
を餘すまじと立向ふ。檢非違使かつらく
と笑ひ。これや此方へ御免ならう是はお

鹿島香取より。悪人の首を取つて廻る事觸れでござりや申す。いかなる葦古高勾麗がもと首でも此の事觸れが太刀先にて。むくつてこくつて切捲つて。地敵の種を三合にしてくれんとの。御託宣でござり申すてござり申すと。無二無三に切廻し濱邊を指してぞ。三五追ひかけける。

山路玉世の姫道行

草刈笛の。地そら音には。呼ばねど鹿の落ち来るに。契りし人は我此處に在りと知らずや思はずや。心にくさとゆかしさと。スエテ都の空の戀しさと。しどろもどろの斑牛。オトリ引綱。取つて引きのばししの字にしては丸めては。のの字に讀みて我故に。死のと見えたる辻占の。變らぬ心ヲシ頼もしく。襷のの字にたぐりかけ。肩腰輕き草の露ヲシオトリこほれ。出でさせ給ひける。野飼の童。いつとなく。知る人得たり友を得て。跡は呼びつき先なるは。薄押しなみ。歌隠れんほ。走りこぎりこぎりや。ころ

びうつの花すり衣。オトリ草刈。衣ほころびて子供遊びの。果ては時雨の。フシ雨雲の。スエテ硫黄が島に立つ煙。同じ思ひを焚きつけになれも焦るゝ姫島や。歌沖に戀路のくまだいろは舟。ほれてほの字の帆が見。ゆる。ほの字のくたれに。誰にほの字のフシ初尾花。小菅白菅。いはま菅。地此の一叢は刈り残せ。妻籠の夜の床にせん堀の蟲と諸共に。刈り取る鎌の鋭くも聲きりくす響

蟲。牛の鞍にも音をなきて歸る家路をまつ。蟲や。さらば笹原さゝがにの秋にそめフシ。絲くり出し。五百機立てし。機械やその藤袴破るなど。鳴くか茨のつるさきに。野飼の駒の。フシやさしくも。故郷の風の北に嘶えていな。けば。越路の雪に故里の空を慕ひて鳴く犬の。別府の湯本はあれとかや。如何に況んや久方の天津雲井を天離り。賤の仕業はいつ君が繪にかくならで思ひきや。見しや聞きしやとばかりに。スエテ草も刈りかね思ひかね。フシ涙を。受けて磨く鎌の。

砥石も。心碎けとや。地夢にもかくと白玉の玉世の姫は胎内の。まだ見ぬ兒の別れぞと。つれなき母に誘はれオトリ行く道筋は多けれど笛に誘はれつま戀ふる。牡鹿の苑の法の。導これなれや。互にそれと道乏のフシ。縋るばかりの戀草も。めは繁りそふは。こ草千草八千草。思ひ草。恐ろし鬼の醜草に。地隔つる中の垣根草力草なく泣き交す心ぞ思ひやられたる。草ばし刈るな笛を吹け。

フシ後に二人が悔み草。毒の草をも身の上と知らぬ手元の暗さには。燈臺草を。クドキ歌思ひ出す思ひ出でずやありし夜の。亂れあひにし枕には葛草をぞ思ひ出す。かのほのく。のほの暗き。黄昏早く寐し時は。蚊帳つり草を思ひ出し。人目思はで肌ふれて起きつ。轉びつさ。めして。相撲取草思ひ出す。通ひ路遠き獨り居の。斑女が閨の淋しさは。茶引草をも思ひ出し。心細しや絲薄。歌。い。風かと聞けば。山の下には風吹く。嵐吹くさりと。嵐吹く。山をはなれ

て風となるナホス風も昔に。フシ吹き返れ葛の裏葉のうらぎぬも。ありし其の夜の移り香を洗ひ落すなすもの草。連れ立つ道のフシ遅かれと。祈る心の生憎に早くいるやの鞆草浮む瀬もなき水草に。身をうめ草と捨草も誠を照らす月草の光のひまを媒介に。顔を見合せ目を合せステテ包む心の内山に。やうやう。歩み着き給ふ。地野飼の牛馬の外繫を兎角しつらひ小袖幕。女房達は姫君の心底を思ひやり。何をするのもうろくとステテ叱られ廻るばかりなり。地跡より下部の荒男樂風呂に火をおこし。數皮毛氈持運ぶ繼母あたりを見廻して。詞今參りの山路といふ草刈はいづくにある。言ひ付けし五種の草刈り取つたるかとありければ。地かゝる事とは露知り給はず。さん候仰に任せ刈り候。あかりもとは燈心草鼠尾花は溝萩。末摘花は紅の花。二十日草とは芍薬牛膝とはいのこづち。何れも仰に任せ今宵満月の露ながら。刈り調へ候と出し給へば繼

母悦び。腕まくりして藥の釜の沸え立つに。捻ぢわけて搾り入れ曲物につき込み。調サア姫是へ此處へおじや。地此處へ來て飲みやいのと言へども姫は應へもせず。わつとばかりに草薙ステテひれ伏してこそおはしけれ。地母は小腕引つ立てエ、卑怯なの。人やら水やら知れもせぬお腹な餓鬼めがそれ程に惜しいか。餓鬼めが父に名残が惜しいか忽ち親が迷惑するが。親が大事か子が大事か夫が可愛いか親が可愛か。些と世上も思へかし鯉骨を割つてなりとも。飲まさきや置かぬと責めけるは、フシ地獄の呵責もかくやらん。地此の時親王心付き此の上は名乗つて出で。兎にも角にもならばやと。御懐中の守刀に手をかけくし給へども。姫の心を量り兼ね涙を止めおはします。フシ御心底こそ切なけれ。地姫君は聲を上げ。ア、心強の母上様やな。父こそ知らぬ妾が子を孫とは思し知らぬかや。如何に自ら繼しきとて。さ程にはなき物ぞとよ。犬猫の

孕みしさへ。馴るれば不便を加ふるも親たる者は身に受けて。子のいとしさを知つたる故せめて此の子を生落し。月日の光りも見せて。殺してたべと手を合せフシ聲も。惜まず泣き給ふ。ナウ山路とやらん御身は郡人と聞く。都に歸り玉世の姫が忍び夫と尋達ひ。此の有様を語りてたべ。斯くと見聞き給ひなば。共に死なんと嘸や悲しみ給ふべし構へてく御命が大事なり當座の歎きに命を捨て。多くの人の苦しみといひ末代末世御名の汚れ。國の爲人の爲御身をかへて。今の無念を悔へ給へと傳へてたべ。とても此の子は過去の約束さりながら。人もこそあれ御身が刈つたる毒草にて。此の子を流し殺す事因果の上の因果ぞやと。夫婦目と目を見合せて叫び上げ咽ひ入り。袖にも膝にもはらくとフシ落つる。涙は水晶の數珠の。切れたる如くにて。フシ草薙の。露に争へり。地繼母いよく腹を立てエ、こゝな者あいら風情を相手にして。言うて

時のあく事かこりや冷めぬ先にちやつと飲みやと。押伏すれば女房達先づ暫くと取付くを。取つて突き口のけ口押分けて思ふさまに注ぎ入れしは。天狗道の三熱の、フシの熱湯ともいひつべし。姫君忽ち腹痛み五體を悩み給ひければすはや駿のまりけるぞと駒繫の草蔭に。御手を引いて女房達オクッ

さまざまいたはり奉る。地あら不思議や有難や清風四方に香しく。玉世の姫の御肌潤すと覚えしが。玉のやうなる若君を易々と誕生あり。心地涼しくなり給ふ。變毒爲薬の佛法不思議。フシ尊かりける奇瑞なり。

地悲しき中にも姫君は悦び抱き奉り。御顔貌を見給へば汚れにも染み給はず。濁りに浸まぬ白蓮の汚泥を出でし御形。柔和の相好忍辱の笑の眉。教主釋尊の再誕とはフシ

後にご思ひ合せける。地繼母驚きこは如何に墮胎薬を飲ませしに。却つて平産しけるはム、合點此の童めが。餘の草を與へしな

待て己れ只置かうか。いで餓鬼めを拵り殺

いてくれんとて。飛びかゝれば姫君はなう今生れし此の若に。何の恨みの候ぞやと。泣き叫び逃げ惑ひ。助けてたべと泣き給ふを聞入れもせず追つかける。時に不思議や野飼の牛むつくと起きて駆け隔たり。齧を嗜み立て角を振り繼母を目かけて飛びかかり。追ひ廻し追ひ散らし。遙かの岡邊に三重追うて行く。地かゝつし所に生駒の宿禰勝舟に追つ立てられ。命ばかりを助からんと無二無三に逃げ來り。草籠を引つ被き上に刈草取り掩ひ。スシ身を縮めてぞ隠れる。地百島太夫は都の使者の歸るさに。姫君斯くと風聞あり直に此の野を此處彼處手分けをして尋ねしが。姫君も親王もやれ百島やれ太夫。これく爰にこれは扱様子具に承り。御館へも参らず直に尋ね参りしが。彌猛心の一念のくろほしを見しらせたり。御扱承れば生駒の宿禰めが。檢非違使と偽り却つて檢非違使に見付けられ。逃げ失せたと承る。たとへ如何に逃ぐるとも

當國の中なれば地牢へ入れたも同然。何時も彼が首は我等が物に候と。いふを聞いて籠共にそろりくるとるざり退く。百島きつと見付け。彼等を威嚇して狂ひ死にさせんと思ひ。縦令敵が東の道へ逃ぐるとも。此の道には某が手の者どもを置きたれば。死に行くも同然なり御心安かれと。地餘所事に言ひければ跡の方へ這ひ戻る。調いや申し此の先には。勝舟が支へ候へば敵の寄ること叶ひ難しと。地嚇せば則ち嚇されて。うごくくと又脇道へるざり退く。調此の道へは御家中の討手の達者に地待伏させて置きしと。使へば使はれ行き兼ねて。跡へうろく先へうごく。狼狽へ廻つて百島に行當る。はつたと睨めば仰天し。被つてゐまする御免あれと。フシ慄きいふこそ笑止なれ。地百島かつらくと笑ひ。調智者は惑はず勇者は懼れずといふ。己れ智恵こそなくとも匹夫の勇でも勇はある。只今殺すも易けれど若宮御誕生の折といひ。殊に勝舟が

鐵人職皇天明川

鐵人職皇天明川

鐵人職皇天明川

鐵人職皇天明川

鐵人職皇天明川

鐵人職皇天明川

鐵人職皇天明川

鐵人職皇天明川

鐵人職皇天明川

鐵人職皇天明川

鐵人職皇天明川

殺しさしの奴なれば勝舟に首討たす。地繩
をかゝれと踏み伏せて。足手を取つて八重
無盡に絡け付ければ。地ア、もう御免く

くと大聲あけて泣き居たるフシ心地よく
こそ覺えけれ。地向の岡より以前の牛糞母
の直中突き通し。肩に振り懸け一散に斬け
來り。親王の御前に膝を折り黃涙を垂れて。

同人間の聲を出し。自らは生駒の宿禰が娘。
五位之介諸岩が妻にて候。配所の夫を貢が
んため室君と呼ばれ。遊君の流の身となり
し所に。少し契りの隔ありしを敵の所縁に
よつて嫌はるゝとは露知らず。嫉妬の恨み
に蛇身となつて此の世を去り。浮みもやら
ぬ苦みの。中に忘れぬ妹背の道。君の御身
をフシ守らんだめ。地獄の責の隙々は閻魔
王に暇を乞ひ。此の牛の魂に入替り御側
を離れぬ志。通ぜし事の有難や。此の忠節
の誠によつて地獄道も遁るべし。なほく
甲ひたび給へといふかと思へば牛は其の儘
起き上り。身震して頭を振り糞母を大地へ

打付けて家路を指して走り行く。地斯くと
聞くより檢非違使長者諸共馳せ參じ。一先
づ館へ移し參らせ都へ注進申さんと。御乘
物を差寄する時に糞母の頭より。ヨハリ電光

の如く飛んで出て虚空に閃めき見えけるが
。忽ち異形の身を現し我はこれ。山彦の皇
子の師範伊賀留田のますらが眼中の腫子な

り。糞母が一心に入つて不思議を見せし
我なるぞや。我秘術を振舞ふならばなかな
か都へ還さじと。虚空に翔つて叫びしが黒
雲四邊を暝まして。山河草木震動して天地
も裂くるべばかりなり。地百島も勝舟も心
ばかりははやれども。太刀も刀も力なく虚
空を睨んで立つたりけり。不思議や若宮左
の御手を少し開き給へば。御掌の裡より
も光明四邊を輝かし。ますらが魔術の力も
盡き大地へかつぱと落つる所を。追つつめ
く刺通せば正體誠の眼の球。貫かれしぞ
不思議なり長者いよく湯仰し。其の夜に
御殿をしつらひて先づく移し奉る。和國

に佛法始まりの種植忍初めし戀草や。草刈
笛の聲の色心の色と思の色。色に和く國
なれば御法に。民も和けり。

第五

地佛日西天に隠れて遺耀東北にかややく。
獅子吼の金言過たす佛法流布は王道の。盛
んの始めとなりける。御誕生の若宮を。

既戸の皇子と名付け參らせらる。これ駒繫
の邊にて。フシ降誕なりし故ならし。地然る
に此の宮御襦袢の内より左の御手を開き給
はず。如何なる體氣の御病か但しは外道の
魅入なるか。一先づ都へ行啓なし參らせ名
醫の教に任せんと。海の戸渡る商人の筑紫
通ひにもてなして。任する風も君がため坐
せるが如き波の上。一日一夜を明石瀉
シ播磨の國にぞ着き給ふ。地山手を見れば
騎馬武者徒歩武者千騎餘り。金銀にて日月
打つたる錦の旗眞先に押立て。東風吹く
風に飄飄して勇みに勇んで打たける。同
勝舟百島こは如何にと怪む所へ。五位之介

諸岩兵藤太入道諸卒を具して御前に跪き。扱も我が君筑紫瀉へ御開きあつて。眞野の長者御語りひの風聞。山彦の皇子安からずや存じつらん。悪黨を語りひ丹州大江山の麓に土城を築き。野面の石垣麥蘆擗要害うとしと申せども。地の利防戦堅固なれば。

御退治の御慮猶豫の由承り。憚りを顧ず我々君の奏聞と稱じ。山彦征伐の勅宣を願ひ奉り候處に。御感誠に淺からず此の度御誕生の若宮に。親王宣下あつて即ち御名を聖德太子と名付け申し。大將軍に立て參らせ朝敵追伐あるべしとの勅命を戴き。日月の御旗を預け下し賜はつて。馳せ參じ候と大息ついで言上す。地親王を始めとして各頭を地に着けて。勅書を拜し奉り。フシ御位は限りなし。地就中兵藤太入道が働き五位之介が忠節。親王親ら人々に御吹聴ありければ。長者一家勝舟もあつと感するばかりなり。地宗徒の御味方八十の眞人武智の郡司。押熊の武者所阿揃の宗方。坂上の古

虎御盃を賜はり軍師軍監軍配者。物見遠見物頭手分け手配り手組を備へ。錦の御旗賜る上は天子の行幸同然なり。往く所幸福あり吉日吉方此の日にあり。時刻移すな打つ立てと貝も太鼓も高砂の。尾上の鐘も巳の時と。輝く月日の御旗を押立てて。こそ三

押寄せけれ。地抑此の山後に險岨を負うて左手に大河流れたり。前に大木伐りかけて亂竹束隙間もなく。所々に井樓矢切を付けて横矢繁くぞ構へける。官軍既に間近くなれば山手川手の前後の備。十里廿重に取捲いて貝鐘鳴らし箒を叩き関の聲をぞ上げにける。地待設けたる城方にも同じく関をぞ合せける。地檢非違使勝舟濠端に進んで大音上げ。御進發の大將は事も愚かや欽明天皇の孫王。厩戸の皇子聖德太子。御父親王の御代官として向はせ給ふ其の意趣は。山彦匹夫外道を重んじ佛神を輕んじ王法を傾けんとす。天是を赦さず急ぎ匹夫が首取つて。神慮をすしめ三世諸佛の報恩

に供へ兼ては宸襟を安じ國家の泰平を致すべしとの。宣旨を蒙り龍蹄を差向けらる命が惜しくば陣頭に股を潜つて降參せよとぞ呼ばはりける。皇子は怒つて甲冑をも帶せず。井樓に駈上つて猛虎の吼ゆる如くなる。大音上げてヤア緩怠過ぎたる廣言やな。日本國が集つても。事とも思はぬ山彦が立籠らんずる城郭へ。昨日今日生れ出でまだ臍の緒も落ちぬ聖徳とやらふんとくとやらいふ悴。鷹に向はんなどとは蟻の鬚にて須彌山を崩さんとするに似たり。ますらはなきか魔法を以てあれ蹴散らせと下知すれば。ますら續いて駈上り。度々某が秘術の手

並を見せけるに。性慾もなき奴ばらいで。片端から立竦みにしてくれんすとぞ呼ばはりける。五位之介諸岩駈け出でて魔法使ひのますら殿。御邊の片目は何としたヲ、結構なる魔法かな御用ならば是にありと。槍先に貫き。是は豊後の府内にて化け廻るを突き止めたるが。調覚えあらう鹽漬にし

て。勝軍の酒宴せんする其の時の。吸物に
せんと思へども只今返す受取れと。地に
抜き捨てて草鞋にてッシ踏み馴つてぞ笑ひ
ける。皇子大きに怒りをなし物な言はせ
そ追つ散らせ。承ると逆茂木引退け突いて
出づれば味方の勢、汐合よきと乗つ取れと。
一度にとどつと喚いてかゝり花よ紅葉と三重
へ戦ひける。フシ味方は速に。乗つたれば
二三度四五度突崩し。朝敵ひるんで見えに
ける。時に敵の中よりも深山の如く揃
つたる。武者こそ五騎出で來たれ。我は皇
子の御味方。黒島雲住荒鷲沖廣鬼正と名乗
つて。大太刀鉞大長刀大薙鎌に九尺の棒得
物々々を提げて木戸口に立並び。寄手の方
に武智押熊阿楠古虎八十の眞人といふ兵
ありと聞及び。見参のため馳せ出でたり。
暗業の勝負ぞや出であへやつと呼ばはつた
り。呼ばれて如何疑々すべき五人一度に駈
け向ひ。ヤアござかき敵好み。地やさし
しほらし参りざぶと五人が五人に駈け分つ

て。得物々々に渡合ひ半時ばかりぞ三重へ
戦ひける。フシ或は打伏せ叩き伏せ五人の敵
を味方の五人。一度に取つてをうど伏せ。
サア末代迄の語り句に一度に首を取るま
いか。ヲ、尤と拍子を揃へ。はらりと首を
掻き落し。地首提けてしづくと味方の陣
に入りければ。官軍一度に聲を上げ。いや
お手柄くとフシどつとどよみも止まざり
けり。地ますすらも今は怏へかね一丈有餘の
鐵の棒。麻より軽く提け佛と仰ぐ親王に。
参り合うて此のますらと。佛道外道の勝負
を試さん親王出でよと罵りける。かゝる
處へ見馴れぬ若武者眞一文字に躍り出で。
柄は八尺の鑓鉞閃いてぞ立つたりける。
諸人はを見れば桶ゆひの久馬平物の具堅め
莞爾と笑ひ。先年皇子殿に参り合ひ系圖を
名乗り申し上ぐれば。具に申すに及ばず定
めて沙汰にも聞き給はん。此の柄道具にて
推量あれ。いらざる職人の武士だてなれど
も。ふと頼まれ奉り仕さいては置かれず。

裏壁かやして跡をつめんと思ひ。具足も拙
者が細工にした桶側胴とはこれなるぞ。一
つ残つたますら殿の。目の玉を申し受け度
しと高らかにぞ呼ばはりけり。ますらから
くと笑ひ。うぬ等が分て某に向はんとは
けがらはし推参なり。此奴討取れ見物せん
味方は無きかと呼ばはれば。地さしつたり
と雑兵ども左右より討つてかゝるをひらり
と外しはつしと受け。數年鍛錬磨して使
ひ覚えし鑓鉞ひらりと斬り捲れば。或
は眞甲片頬片耳鼻柱。腕先膝節打ち缺かれ
フシ四方へばつとぞ逃けてけり。地追行く體
にて取つて返しますすが突いてつつ立つた
る。鐵の棒をひらりと取る南無三寶と振返
り。掴み付くを飛び上り。続け打に打ちか
けくと味方の陣へ追込んだり。地ますらは
追はれて途方を失ひ。後は軍兵前は手ひど
く打立つる。ぐるぐ舞うて立つたるはフシ
あつばれ氣味よき次第なり。久馬平聲を
かけサア是迄は仕畢せたり。是からはお侍

衆に振舞ひ申す。一筈つづ遊ばせとどつと笑へば。勝舟諸岩藤太入道百島太夫。然らばお辭儀申さぬと。地思ひくゝに斬伏せ斬伏せづだゝに斬つて棄て。詞いつに變らぬ久馬殿お手柄ざふと褒めければ。あの仰しやます事わいのと、フシ會釋してこそ入りにつて取れ、承ると諸軍勢喚き叫んで斬入ける。皇子今は詮方なく幾年古りし桐の木。一の梢に逃げ登り傳へし秘文を唱ふれば。忽ち梢に葉を生じ。王子の姿を隠せしは、フシ不思議なりける秘術なり。地寄手は皇子を見失ひ官軍あぐんで見えける時。親王宮を抱き參らせ。地南無佛法擁護の諸天神外道の根を絶ち我が國に。佛道成就なさしめ給へと念じ給へば。其の時若宮虚空に向ひ。南無佛と三度唱へて御手を開き給へば。一躍に佛舍利の光明棚引き薫風渡つて桐の木のはらりはらりと吹落し、フシ皇子の姿顯然たり。其の時皇子大音上げ。我

はこれ提婆達多が後身たり。唐土日本に再來すと雖も。佛力に支へらるゝ口惜しさよ。汝聖德太子上位にあつて佛道を弘通すといふとも。我亦臣下と生れ出で現在に本意を遂ぐべきぞや。最後の程をこれ見よと枯木の節に頭を打當て。ゑいやくと打ちければ。微塵になつて失せけるは、フシ只阿梨樹枝の如くなり。かゝる所に稻目の臣勅使として發向あり。天皇御位を親王に御讓

り。玉世の姫は皇太后聖德太子は儲の君との宣旨なり。目出度勝閑上けられよと高らかに述べらるる。目出度し嬉し千秋樂萬歳樂の萬代迄。是を祝ひの始めにて猶打續く松竹の齡も。盡きず世も盡きず佛神擁護の此の所繁昌。にこそ榮えけれ。

右此本者依爲懇望文句音節等
悉校合加祕密令開版者也

竹本筑後掾

大坂

北久寶寺町
御堂筋西側

本屋
仁兵衛團

